教資

漢文

一

中等學校教科書株式會社

廣島高等師範學校藏書印
廣島高等師範學校圖書之印
貸出禁止
50620
教科書文庫
5.
820
46-1947
01304
49563

教資

文部省検定済

昭和22年12月15日　高等学校用

漢文

一

中等學校教科書株式會社

中央図書館

広島大学図書

0130449563

漢文一

目次

序說……一

序篇

良藥苦於口（說苑）……二

勿以善小而不爲……蜀 劉備 二

功禍之所由……宋 蘇洵 三

毋苟得（禮記）……三

愛親敬親（孝經）……三

讀未曾見之書……明 謝肇淛 三

喪與其易也寧戚（禮記）……三

苛政猛於虎（禮記）……三

守株不得兎（韓非子）……四

以敬爲主……宋 程頤 五

上篇

春夜宴桃李園序……唐 李白 六

長江三題……李白 七

黃鶴樓送孟浩然之廣陵……鹽谷世弘 六
望天門山……李白 六
早發白帝城……李白 六
送安井仲平東遊序……廣瀨建 三
桂林莊雜詠 示諸生……漢 司馬遷 三
管仲傳……唐 杜甫 四
貧交行……司馬遷 四
孟嘗君好客一……宋 王安石 七
讀孟嘗君傳……晉 陶潛 三
孟嘗君好客二(國策)……六
桃花源記……陶潛 四
飲酒……李白 四
山中問答……唐 王維 五
竹里館……宋 周敦頤 五
愛蓮說……五代 劉昫 六
李白傳……李白 六
望廬山瀑布……李白 六

峨眉山月歌……李白 六
遊洞庭……李白 七
記承天夜游……宋 蘇軾 七
鴻門之會……司馬遷 四
四面楚歌……司馬遷 四
烏江……唐 胡曾 五
韓信僞怯……司馬遷 五
張良强忍……司馬遷 四
留侯論……蘇軾 七
經下邳圯橋懷張子房……李白 八
蘇武……五代 李瀚 八
班超……元 曾先之 八
塞上行……唐 王昌齡 八
出塞……唐 王之渙 八
涼州詞……唐 王翰 八
逢入京使……唐 岑參 八
唐太宗……宋 司馬光 八

輕、徭薄、賦
剖、身藏、珠
縱囚論……宋　歐陽　脩　七一
朗詠所收白詩……唐　白　居易　六九
暮立
八月十五日夜禁中獨直對、月憶、元九、
九月八日酬、皇甫十見、贈
香爐峰下新卜、山居草堂、初成偶題、東壁、
小石城山記……唐　柳　宗元　七一
江雪……柳　宗元　七三
遠山……歐陽　脩　七三
故事雜鈔……七三
下　篇
論語鈔……八〇
大學鈔……八九
附　篇……九二

序說

漢　文

中等学校・高等学校の教科目としての漢文とは必ずしも Chinese classics ではない。そうかといって、Japanese classics でもないことはいうまでもない。その内容は、

一、訓読された支那の文語文
　The Chinese written language in the classical style, which is pronounced in Japanese.

二、日本人が作った文語体の華文
　The Chinese written language written by Japanese in the classical style.

三、中華民國を認識するために

四、わが過去の文化を知るために

などがある。

東洋文化の淵源は支那にある。支那文化と同じく古代文明の一に数えられる印度文化は西方に影響して、佛教以外は東方へは影響していないといえよう。これに反して支那文化は周囲の民族がひとしくあこがれたもので、非常な力をもって四方に傳わった。思想も、学問も、そのほか、文学をはじめ各種の藝術もみなそうである。

漢民族そのものを正しく理解し、その形成する今日の中華民國を認識するために、その民族が過去において残した文献を読むことが必要であることはいうまでもない。他國の人々の筆によらず、かれらみずからの筆を通じて、これを正当に解釈することが第一である。

わが過去の文化を知るために、漢文がなぜ必要であるかというと、わが上代には、固有の文字が

われ〳〵は、なぜ漢文を学ぶのか。それには、いろ〳〵の目的がある。一例を挙げると、

一、東洋文化の淵源を知るために

二、漢民族を正しく理解するために

なく、はじめ、朝鮮半島を経て、支那の文字文章が輸入されたので、わが先祖は、その文体をまねて作り、さらに、漢字の音や意をかりて、自己の言語を写す方法を考え出した。そのはじめは、かの國の文章を全部傳來の支那音で読んだであろうが、やがて、日本語に訳す方法として、いわゆる訓読が行われるようになり、その訓読の方法にもいつしか一種の型ができて、訓点が加えられた。

かゝる現象を見たあいだに、彼我の交渉は隋、ついで唐と、直接の國交が行われるようになった。かの國の制度文物はます〳〵盛んに輸入されて、その模倣がわが國に盛んであった。

わが國に輸入された漢字音は、はじめは半島と交通が行われていた揚子江下流の地域の音であったが、國都長安との交通が起るにおよび、その地方の音も傳わった。わが祖先が発音しにくかった音は、訛ったり、改められたりしたが、原音がすでに異なるので、両者は一様でなかった。われわれは、前者を呉音、後者を漢音と呼びならわしている。呉とか、漢とかいうのは、土地の別称で、時代を示すものではない。

思想界においては、間接直接に、儒教、老荘思想、佛教が傳來し、早くも、わが上代の文献にいちじるしい影響を見た。それのみか、唐との國交が絶えても、前には僧侶により、後には商人によって、彼我の交通は永くつゞき、精神文化のみならず、物質文明の輸入も相つぎ、わが今日の衣食住の中には、かの國の要素が少なからずはいっているのである。故に、漢文は、わが過去の文化を知るのに必要欠くべからざるものである。

わが最古の文体は漢文であるといえる。漢字から仮名が作られ、仮名まじりの國文が成立してからも、久しい間、公文には漢文が使われ、一般の文章にも、漢文の書き下しや、いわゆる和漢混淆文が少なくなかった。ことに、書簡文には、いわゆる往來物から、候文という形ができ、漢字をあ

た部分や、漢文流に漢字の順序を顛倒した部分が多い、特殊の文体が用いられたが、これらは、すべて漢文の流行の影響であった。漢文そのものも、明治・大正の世まで新しく作られ、ことに、碑文墓誌などは、漢文体によるのが常識であった。

漢詩もいわゆる漢文の中に入れて考えられることが多いが、これも訓読され、現在まで、わが國独得の吟詠法によって吟ぜられている。

漢　字

漢文を構成するものは、いうまでもなく漢字・漢語である。

漢字はローマ字のような音標文字ではなく、表意文字であるから、形と音との外に、義（意味）を持つ。漢字は、漢民族の間で古く作られ、使用されつゝ発展したもので、一人の手で一時に作られたものではない。そのはじめは、物の形に象ったり、意味を含む符号で形のないものを表わしたりしたが、後には、これらを轉用して、別の意味を持たせたり、または二つ以上の漢字を合わせて新字を作ったりした。

かゝる表意文字によって構成された漢語漢文は必然的に視覚に訴える特徴を持つ。また音調の上から聽覚に訴える。故に、訓読によると、著しく聽覚による美感が殺がれる。近世、わが國人によって作られた漢文漢詩は、大部分、訓読によってつゞられたものであるから、音読される時は、美感を伴なわないものが多い。韻文たる漢詩は特にそうである。わが國の名詩が民國人に傑作と思われぬのはこれがためである。漢文音読が叫ばれる主因もこゝにある。しかし、われ〳〵が漢文を学ぶのは、必ずしも専門家たらんがためではない。その上、中等・高等諸学校の教科としての漢文は國語科の補助であるから、訓読は避けられない。また、わが古典を理解する一法としての漢文は、訓読されるのが当然である。

漢字がわが國に弘く行われ、こゝにいわゆる訓

というものが生じた。訓は一種の訳で、各漢字の訳語として一定された國語であるが、適当な訳語が見つからぬ時には、新しく訳語を作ったこともあるし、逆に、國語にあたる漢字が見つからぬ時には、それに近い意味の漢字をあてたり、同じ言葉の持つ別の意義に相当する漢字をあてた（公に対する私の字を自己の意に用いる）。多くの中には、誤用が習慣となったものもある。時には、わが國で新しく漢字を作ったが、その中には、もともと漢字があったものと偶然同字になったため、訓が、もとの漢字の義と一致しなくなったものがある。これは木や魚などの名（萩・鮎）に例がある。

文　章

漢字漢語の視覚聴覚に訴える美感は、直ちに漢文の特徴となる。第二に、漢語漢文は簡潔で、同意の文章では、英語よりも短い。漢字制限や廃止論が長年叫ばれているのに、進駐軍・精算拂などのように、漢語どころか、漢字を並べて、新しい熟語を作ったり、打倒・歓送などのように北京語をそのまゝ使ったりするのもこれがためである。第三に漢語漢文の表現はあいまいである。これは主として、簡潔の反面であるともいえようが、それが短所のようでもあり、また長所ともなる。品詞・單複・時・格の別や、定形・不定形の差も明瞭でない。主語が省かれていることも多く、同一文字をなるべく使わぬことが巧みな詩文であるといわれるため、人を呼ぶのに、名・字・号・官名など、多種の表現を使うことがある。第四に、漢文には修飾の語が多い。故事成語を繁用する。第五に比喩が少なくない。第六に誇張がはなはだしい。これらの特性は、いずれも文義を不明瞭にさせる。このわかったような、わからないような境地が、読む人におくゆかしそうな氣分をも與えるが、文を樂しんだ古人はそこに滿足していたのである。故に、漢文を使っては自然科学的敘述はむずかしい。

教　材

往年の教科書は、句例にはじまり、日本人の作った漢文から次第に漢土の作品を採り入れ、内容は文藝方面よりも教訓方面に偏していた。しかし從來の教材となっていた日本人の作品は、必ずしも漢文の形によらねば作者が表現できなかったものではない。句例をはじめ、内容の空疎なものが少なくなかった。故に、編纂委員の意見で、わが近世の作品を大部分除き、かの國の人々の文藝を味わうという方針に從い、教員学生の希望される内容の統計を参考して編んだものがこの教科書ではあるが、各教材の生まれ出た環境は、生徒諸君の環境とは、一致しないのであるから、その内容について、現在と引きくらべて、教材をもとに討論をすることは、編者の望むところである。中には、もとより他山の石として、諸君の学ぶべき点も少なくないであろう。文辞も味わって、古人の表現の方法も研究されたい。

テキストそのものについては、編者はかなり注意し、なるべく、よりどころがあって、しかも読みやすい文字を採ったつもりである。編者一人の私意によって改めた文字はない。その各文章の出所は作者の詩文集によったものは、これが明記をさけた。その理由は、同一人の集でも、版本によって巻次を異にするし、またテキストを校訂した結果、必ずしもある本にのみよらなかったからでもある。

漢文はむずかしいという批評もあるから、全書ならびに各課の序説を試み、各課の注解を附した。序説をこゝにまとめ、注解を巻末にまとめたのは自習上の效果と、印刷上の便宜とに基づく。諸君は各課を教室で習う前に、あらかじめ一読しておいて欲しい。注解は、理想としては、できるだけ多くし、辞書を要しないようにしたいのであるけれど、今日の用紙の制限では、そうはできないので、固有名詞を中心に、そのほかは、日華同

文であるためにかえって誤解を招きそうな部分に重点をおいた。注の文体をわざと文語体にしてややむずかしくしたのは、文語体によって漢文口調を知らせようと試みたもので、生徒に注解全文の理解を強いることは、編者の必ずしも要求するところではない。

諸君は必ずしも専門に漢文を学ぶ人ではない。わが國語と文学との理解の一手段として学ぶのである。故に、わが先祖の苦心して考え出した漢文の國語化の一方法である訓読の方法を採用した。漢字制限の実行に伴ない、振りがなを多くし、送りがなも巻二の下篇でわずかに略し、巻三になって同一形式の句法から省略をはじめて、次第に省略を多くした。

序　篇

訓点には、句読の外、今用いられるものは、返点(反点)・送仮名である。返点とは字の読み方を示す符号で、現行の形式では、上下二字を逆の順で読む時には、「レ」(もとはYのように書いたので「カリガネ」、今は俗に「レ点、レ返り」とよぶ、二字以上上に返って読む時には「一・二・三」、その「一・二・三」を施した字の間で更に返る時は、次の一連を「上・中・下」、更に入りまじる時は「甲・乙・丙……」、「天・地・人」等の符号を使う。送仮名は捨仮名ともいう。返点は字の左下(レ点は両字間の左傍)、送仮名は右下に施す。

漢文の語の配置は英語に似ている。主語は上、述語は下、ある語を詳しく言い表わす語は、言い表わされる語の上にあるのが正式である。

今、句法のやさしいものから、ほゞ順を追って、むずかしいものに及び、内容も、ほゞ格言・短文から、故事・教訓へと発展させる。訓の附け方に注意すること。

上　篇

名家の作品を、ほゞ難易の順と、内容の関連とを考えつゝ收録し、詩を挿入した。史的記述はだいたい春秋戰國から唐まで、有名な事件や人物を順々に排列した。

○春夜宴桃李園序　春にちなんで、春夜の宴遊の快樂を記した短文を錄する。豪放磊落で知られた大詩人の心理を味わう。

○長江三題　李白の詩人としての才を見る。春夏の長江流域の風景をうかゞう。

○送安井仲平東遊序　江戸末期の漢学者両人を通じて、学友の情愛を見ることができる。近世日本の儒者の作品の中で、有名なものの一篇。

○桂林莊雜詠　示諸生　塾生の間の友情を歌った有名な詩。

○管仲傳　管仲と鮑叔牙との話は、昔から友情をいう例に引かれ、管鮑の交とさえいわれる。今、その有名な話を、史記の名文によって紹介する。この文を読んだら、現代人の考え方によって、管仲の言を批評しあってもらいたい。後半は、「衣食足つて礼節を知る。」という名言の出所を明らかにし、併せて、蔣主席の重んずる四維(礼・義・廉・恥)が治國の大綱であるという考え方の原拠を示す。

○貧交行　友情を歌った名詩。

○孟嘗君好客一　これも有名な故事であり、また有名な文章である。人間はどんなにつまらぬ者でも、どこか役に立つところがある。

○讀孟嘗君傳　前課の事実を批評し、孟嘗君が小才を愛して、眞の名士を得なかったといっている。短い要領を得た文である。

○孟嘗君好客二　孟嘗君の食客の中で有名な馮諼の話。史記には馮諼に作っている。この課では、國策の名文章によってこの話を示した。

○桃花源記　江戸時代から愛読された名文。勿論事実ではなくて、俗世界をいとうた作者が描いた理想郷であろうが、わが國でも、先ごろまで「桃源の夢を貪る」とか、「武陵桃源(理想郷)」とかいう言葉は常に使われていた。通行の俗本の文字

を正しておいたから、今までの教科書の文とは違うところがある。

○飲酒　前課と同じ作者の、人口に膾炙した韻文を採った。二十首中の一。自然を相手の詩人の生活がわかる。

○山中問答　陶潛の影響を受けた詩。「桃花流水」の句は桃花源記によってできた文句である。浮世を離れた山中の生活は俗人にはわからないと歌ったもの。

○竹里館　作者王維は陶潛の影響を大いに受けた詩人で、画をもよくし、全くの藝術家であった。元來、詩は画と趣を一にするもの。かれは「詩中に画あり、画中に詩あり。」とまで批評された。

宋之問の藍田の別荘を買って、そこで、琴をひいたり、詩を作ったりしていた。

○愛蓮說　唐の人々は牡丹のこい色を愛し、富貴の相としていた。今でも珍重される。その反対に宋学者である周は、蓮の花が沼の中から出て、土に染まぬのを有德者に比して貴んだ。今でもこの考え方はある。わが國のように、蓮を佛教にちなんで、不幸の時のものとするのとは違って、その絵は常時にも使われる。蓮を描いた茶筒の贈り物は平素のものである。

○李白傳　本巻には李白の詩を多く收めているから、再び李白の詩を錄する前に、かれの傳記を示す。豪放な天才的詩人の生活をうかゞいうる。

○望廬山瀑布○峨眉山月歌○遊洞庭　第十二課に対して、長江流域の勝地の秋景を歌った李白の詩を錄してみた。瀧の水勢を天上から落ちて來たものかと形容した。かれが廬山にあったのは、安祿山の乱を避けた天宝十四年のことである。峨眉山月歌は至德二年、遊洞庭は乾元二年、夜郎に赴く途上の作、同遊に一族の李曄と賈至とがあった。

○記承天夜游　月夜を描いた金玉の文。時にかれは黄州（湖北省黄岡縣）の通判であった。

○鴻門之會　史記は古文の代表的な作品として、

唐宋の古文作家はもとより、明清の作家、ことにいわゆる桐城派（安徽省桐城出身の古文作家）は非常にこれを重んじた。その中での名文は項羽本紀で、その中でもこの鴻門の会の一節を第一等とする。その内容よりも、事実を誇張して筆にする、漢文の形容法を観察してほしい。なお、本課の中には「大行不顧細謹云々。」「衣錦夜行」。「沐猴而冠。」など、明治・大正年間によく使われた語の典故を含む。

○四面楚歌　項羽本紀の名文の中で、も一つ「四面楚歌」という故事の出所を示す。項羽が敗れて美人と別れる悲劇は、支那文学の題材として、各種の文藝に現われている。その出所としても重要な文である。

○烏江　前課の事実を歌った詩を、宋元からわが五山文学時代に流行した詠史詩によって紹介。

○韓信儁怯　韓信の胯くゞりは彼の忍耐ぶりを記した名文といわれる。

○張良强忍　張良の忍耐をうつした有名な古文である。

○留侯論　前課の批評として、東坡の有名な文章を採った。かれも、張良の忍がよく高祖を援けて大業をなさしめたという考えである。

○經下邳圯橋懷張子房　前二課のことを歌った詩を錄した。

○蘇武　前漢の史実として、匈奴に使した蘇武の話を記す。

○班超　後漢の史実として選び、また「虎穴に入らずんば」の有名な語を示す。

○塞上行○出塞○涼州詞○逢入京使　辺塞詩人と呼ばれる、四家の塞外を歌った名作を錄す。かれらの作は体驗によるものが少なくない。

○唐太宗　通鑑の名文の中で唐の太宗の逸話二條を拔いた。

○縱囚論　太宗が死刑囚を一時解放したことの是非を論じた名文。

○朗詠所收白詩　藤原公任編の和漢朗詠集は、和漢の漢文を和歌と比較させて、分類編輯したものであるが、白樂天の詩を非常に多く採っている。朗詠には全詩を收めていないが、今、白氏の集によって各全篇をかゝげ、そのよみ方には必ずしも朗詠流をとらない。

○小石城山記　柳宗元が永州司馬に左遷されていた時に作った永州八記の末篇。永州は今の湖南省内。この一篇では、石城山の山水の奇を賞し、造物者がかゝる奇勝をこの僻地に作ったのは、將來この地に流される不遇の賢者を慰めるためであったろうと、みずから慰めている。

○江雪　柳の詩はその文と同じようなところがある。不遇なかれは、自然を友として文藝にひたっていたのである。この詩、第一・二句に雪の文字を表わさずに、飛鳥や人跡の絶えたことをいってほのめかし、結句で雪の字を出している。

○遠山　前課と同じような敘景の詩を、宋の古文作家の詩で示した。

○故事雜鈔　近ごろ、急に漢文の故事を使うことが少なくなったが、明治・大正の作品にはすこぶる多く使われている。今、その例を挙げる。

○古典鈔　本卷には、まず代表的古典として、論語を收錄した。この書はおそらく、他学派の勢力と対抗するために、孔子の弟子あたりが集まって孔子の言行についての傳えをまとめたものであろう。支那の過去の知識人の知識の基礎をなしたものであるから、その作り出した文藝を知るにも、今日の中華民國を理解するにも、本書の内容は知っていなければならぬ。わが國にも古く傳わって、古來の言語に、文学に、影響した点は少なくない。西洋の支那学者も必読の書としていて、多くの國の言葉に訳されている。次に、もと礼記中の一篇である大学の一部を鈔錄した。四書の解釈書は多いから、紙数制限の点から、今回はこの部分の附注は省略する。

序篇

良藥苦於口

孔子曰、良藥苦於口、利於病。忠言逆於耳、利於行。（說苑、正諫）

勿以善小而不爲

劉備

勿以惡小而爲之。勿以善小而不爲。（三國志注）

功禍之所由　蘇洵

夫功之成、非成於成之日。蓋必有所由起。禍之作、不作於作之日、亦必有所由兆。（管仲論）

毋苟得

臨財毋苟得。臨難毋苟免。狠毋求勝。分毋求多。（禮記、曲禮）

愛親敬親

愛親者、不敢惡於人。敬親者、不敢慢於人。（孝經）

讀未曾見之書　謝肇淛

讀未曾見之書、歷未曾到之山水、如獲至寶、嘗異味。一段奇快難以語人也。（五雜組卷十三）

喪與其易也寧戚

喪禮與其哀不足而禮有餘也、不若禮不足而哀有餘也。（禮記、檀弓上）

苛政猛於虎

孔子過泰山側。有婦人哭於墓者而哀。夫子式而聽之、使子路問之曰、子之哭也、壹似重有憂者。而曰、然。昔者吾舅死於虎。吾夫又死焉。今吾子又死焉。夫子曰、何爲不去也。曰、無苛政。夫子曰、小子識之。苛政猛於虎也。（檀弓下）

守株不得兎

宋人有耕田者。田中有株、兎走觸株、折頸而死。因釋其耒而守株、冀復得兎。兎不可復得、而身爲宋國笑。（韓非子、五蠹）

以敬爲主

程頤

近世淺薄、以相歡狎爲相與、以無圭角爲相歡愛。如此者安能久。若要久、須是恭敬。君臣朋友、皆當以敬爲主也。（小學、嘉言）

上篇

春夜宴桃李園序

李白

夫天地者萬物之逆旅光陰者百代之過客也而浮生若夢爲歡幾何古人秉燭夜遊良有以也況陽春召我以煙景大塊假我以文章會桃李之芳園序天倫之樂事群季俊秀皆爲惠連吾人詠歌獨慚康樂幽賞未已高談轉清開瓊筵以坐花飛羽觴而醉月不有佳詠何伸雅懷如詩不成罰依金谷酒數

長江三題

李白

黃鶴樓送孟浩然之廣陵

故人西辭黃鶴樓　煙花三月下揚州
孤帆遠影碧空盡　唯見長江天際流

望天門山

天門中斷楚江開　碧水東流至此廻
兩岸青山相對出　孤帆一片日邊來

早發白帝城

朝辭白帝彩雲間　千里江陵一日還

兩岸猿聲啼不盡　輕舟已過萬重山

送安井仲平東遊序

鹽谷世弘

嘗觀於當今之學徒、其在庠校、孜孜勤苦者有矣。及退庠則倦焉。退庠而不倦者有矣。及畜妻子則衰焉。畜妻子而不衰者有矣。及獲祿位則廢焉。獲祿位而不廢者有矣。逢一患嬰一災則挫焉。蓋其退庠而倦者、其志小者也。畜妻子而衰者、其器狹者也。獲祿位而廢者、其意滿者也。逢一患嬰一災而挫者、其氣不剛者也。吾觀於當今之學徒衆矣。其能退庠而不倦、畜妻子而不衰、獲

祿位而不廢、逢災患而不沮、不挫、若我安井仲平者、未多覯也。仲平飫肥人。眇然小丈夫、狀寢陋甚。歲之甲申、來入昌平學。居三年、矻矻不少懈。讀書眼透紙背、識慮高卓、議論出人意表。予深畏事之。歸鄉後、歲數次、必有書至。大率激憤忼慨、以僻壤乏師友爲言。其藩士之來于東者僉云、仲平少時孤介、短於容人。今則直而平、方而恕、接衆諧和、事長有禮。闔藩敬信。至參預國事、致身奉公、所建白皆切時務、有著績可傳述。而講學則益勤矣。間從其君、祗役江戸。所居舍、湫隘樸陋、塵埃滿席。而讀書之燈常炯炯。時從師友、出其新得、輒即驚人。戊戌、

歳、遂辭官挈家、來就學於江戸。居無幾而逢火、資材蕩盡。未踰年、季女又病痘夭。仲平自降祿爵、離桑梓、孑然僑居乎三千里外、竈突未黔、累逢不虞之難、人倫之變。皆人所不能堪。而志氣不少撓。讀書日必盈寸、作文年可以囊計。齡垂五十、俛焉刻厲、不知頭之將蒼。此豈今世之士哉。仲平巧心計。自言、吾於數術、不學而能焉。以予觀之、其稟於天者、於智特深。古人云、性敏者、多不好學。仲平以最敏之質、嗜學甚於食色。故格致日新、識度日躋。治家善審出入之計、不虞之變、待之有備。推而至邦國天下。其於利病得失、確有成算。咸可施行。謂之非

今世之士、非譽也。予賦性鈍、百事皆拙。而於算最瞶。以故治產無檢、終歳栖栖、精神殆乎耗。自有妻孥、業覺日退。而事君無狀、未能涓埃益乎國。居恆觀於仲平、以自勵。然惟恐其終身不能及也。今茲季夏、仲平欲濟刀禰河、登日光山、還軼北總、遊于水府、觀名公賢佐之所經綸、然後東入陸奥、縱覽金華・松洲之勝、與衣川・高館之陳蹟、壯其意氣、以益爲進學之資。其驚人者、將滋不可測也。嗚呼可畏也哉。

桂林莊雜詠　示諸生

廣瀨　建

休道他鄉多苦辛　同袍有友自相親
柴扉曉出霜如雪　君汲川流我拾薪

管仲傳

司馬遷

管仲夷吾者、潁上人也。少時常與鮑叔牙游。鮑叔知其賢。管仲貧困、常欺鮑叔。鮑叔終善遇之、不以爲言。已而鮑叔事齊公子小白、管仲事公子糾。及小白立爲桓公、公子糾死、管仲囚焉。鮑叔遂進管仲。管仲既用、任政於齊。齊桓公以霸、九合諸侯、一匡天下、管仲之謀也。管仲曰、吾始困時、嘗與鮑叔賈、分財利多自與。鮑叔不以我

爲貪。知我貧也。吾嘗爲鮑叔謀事、而更窮困。鮑叔不以我爲愚。知時有利不利也。吾嘗三仕、三見逐於君。鮑叔不以我爲不肖。知我不遭時也。吾嘗三戰三走。鮑叔不以我爲怯。知我有老母也。公子糾敗、召忽死之、吾幽囚受辱。鮑叔不以我爲無恥。知我不羞小節、而恥功名不顯於天下也。生我者父母、知我者鮑子也。鮑叔既進管仲、以身下之。子孫世祿於齊、有封邑者十餘世。常爲名大夫。天下不多管仲之賢、而多鮑叔能知人也。管仲既任政相齊。以區區之齊在海濱。通貨積財、富國彊兵、與俗同好惡。故其稱曰、倉廩實而知禮節、衣食足而知榮

辱。上服度則六親固。四維不張、國乃滅亡。下令如流水之原、令順民心。故論卑而易行。俗之所欲、因而予之、俗之所否、因而去之。其爲政也、善因禍而爲福、轉敗而爲功。貴輕重、愼權衡。（史記、管晏列傳）

貧交行　杜甫

翻手作雲覆手雨　紛紛輕薄何須數
君不見管鮑貧時交　此道今人棄如土

孟嘗君好客一　司馬遷

孟嘗君客無所擇、皆善遇之。人人各自以爲孟嘗君親己。秦昭王聞其賢、乃先使涇陽君爲質於齊、以求見孟嘗君。孟嘗君將入秦。賓客莫欲其行、諫不聽。蘇代謂曰、今旦代從外來、見木偶人與土偶人相與語。木偶人曰、天雨子將敗矣。土偶人曰、我生於土、敗則歸土。今天雨流子而行、未知所止息也。今秦虎狼之國也。而君欲往。如有不得還、君得無爲土偶人所笑乎。孟嘗君乃止。齊湣王二十五年、復卒使孟嘗君入秦。昭王卽以孟嘗君爲秦相。人或說秦昭王曰、孟嘗君賢而又齊族也。今相秦必先齊而後秦。秦其危矣。於是秦昭王乃止。囚孟嘗

君、謀欲殺之。孟嘗君使人抵昭王幸姬求解。幸姬曰、願得君狐白裘。此時孟嘗君有一狐白裘、直千金、天下無雙、入秦獻之昭王、更無他裘。孟嘗君患之、徧問客、莫能對。最下坐有能爲狗盜者。曰、臣能得狐白裘。乃夜爲狗、以入秦宮藏中、取所獻狐白裘至。以獻秦王幸姬。幸姬爲言昭王。昭王釋孟嘗君。孟嘗君得出、卽馳去。更封傳變名姓、以出關。夜半至函谷關。秦昭王後悔出孟嘗君、求之已去。卽使人馳傳逐之。孟嘗君至關。關法雞鳴而出客。孟嘗君恐追至。客之居下坐者、有能爲雞鳴、而雞盡鳴。遂發傳出。出如食頃、秦追果至關。已後孟嘗君

出乃還。始孟嘗君列此二人於賓客、賓客盡羞之。及孟嘗君有秦難、卒此二人拔之。自是之後客皆服。（史記、孟嘗君列傳）

讀孟嘗君傳

王安石

世皆稱孟嘗君能得士。士以故歸之、而卒賴其力、以脫於虎豹之秦。嗟乎、孟嘗君、特雞鳴狗盜之雄耳。豈足以言得士。不然、擅齊之强、得一士焉、宜可以南面而制秦。尙何取雞鳴狗盜之力哉。夫雞鳴狗盜之出其門、此士之所以不至也。

孟嘗君好客 二

齊人有馮諼者。貧乏不能自存。使人屬孟嘗君、願寄食門下。孟嘗君曰、客何好。曰、客無好也。曰、客何能。曰、客無能也。孟嘗君笑而受之曰、諾。左右以君賤之也、食以草具。居有頃、倚柱彈其劍、歌曰、長鋏歸來乎、食無魚。左右以告。孟嘗君曰、食之比門下之魚客。居有頃、復彈其鋏、歌曰、長鋏歸來乎、出無車。左右皆笑之以告。孟嘗君曰、爲之駕比門下之車客。於是乘其車、揭其劍、過其友曰、孟嘗君客我。後有頃、復彈其劍鋏、歌曰、長鋏歸來乎、無

以爲家。左右皆惡之、以爲貪而不知足。孟嘗君問、馮公有親乎。對曰、有老母。孟嘗君使人給其食用、無使乏。於是馮諼不復歌。後孟嘗君出記、問門下諸客、誰習計會、能爲文收責於薛者乎。馮諼署曰、能。孟嘗君怪之曰、此誰也。左右曰、乃歌夫長鋏歸來者也。孟嘗君笑曰、客果有能也。吾負之未嘗見也。請而見之。謝曰、文倦於事、憒於憂、而性懦愚、沈於國家之事、開罪於先生。先生不羞、乃有意欲爲收責於薛乎。馮諼曰、願之。於是約車治裝、載券契而行。辭曰、責畢收以何市而反。孟嘗君曰、視吾家所寡有者。驅而之薛、使吏召諸民當償者。悉來合券。

券偏合。起矯命、以責賜諸民、因燒其券。民稱萬歳。長驅到齊、晨而求見。孟嘗君怪其疾也、衣冠而見之曰、責畢收乎。來何疾也。曰、收畢矣。以何市而反。馮諼曰、君云視吾家所寡有者。臣竊計、君宮中積珍寶、狗馬實外廐、美人充下陳。君家所寡有者、以義耳。竊以爲君市義。孟嘗君曰、市義奈何。曰、今君有區區之薛、不拊愛子其民、因而賈利之。臣竊矯君命、以責賜諸民、因燒其券。民稱萬歳。乃臣所以爲君市義也。孟嘗君不說曰、諸。先生休矣。後朞年、齊王謂孟嘗君曰、寡人不敢以先王之臣爲臣。孟嘗君、就國於薛。未至百里、民扶老携幼、迎君道中。孟

嘗君顧謂馮諼、先生所爲文市義者、乃今日見之。馮諼曰、狡兎有三窟、僅得免其死耳。今君有一窟。未得高枕而臥也。請爲君復鑿二窟。孟嘗君予車五十乘、金五百斤。西遊於梁、謂惠王曰、齊放其大臣孟嘗君於諸侯。諸侯先迎之者、富而兵强。於是梁王虛上位、以故相爲上將軍、遣使者、黃金千斤、車百乘、往聘孟嘗君。馮諼先驅、誡孟嘗君曰、千金重幣也。百乘顯使也。齊其聞之矣。梁使三反。孟嘗君固辭不往也。齊王聞之、君臣恐懼、遣太傅賫黃金千斤、文車二駟、服劍一、封書謝孟嘗君曰、寡人不祥、被於宗廟之祟、沈於諂諛之臣、開罪於君。寡人

不足爲也。願君顧先王之宗廟、姑反國統萬人乎。馮諼誡孟嘗君曰、願請先王之祭器、立宗廟於薛。廟成。還報孟嘗君曰、三窟已就。君姑高枕爲樂。孟嘗君爲相數十年、無纖介之禍者、馮諼之計也。（國策、齊下）

桃花源記

陶潛

晉、太元中、武陵人捕魚爲業。緣溪行、忘路之遠近。忽逢桃花林。夾岸數百步、中無雜樹。芳華鮮美、落英繽紛。漁人甚異之、復前行、欲窮其林。林盡水源、便得一山。山有小口、髣髴若有光。便捨船、從口入。初極狹、纔通人。復行

數十步、豁然開朗。土地平曠、屋舍儼然。有良田美池桑竹之屬。阡陌交通、雞犬相聞。其中往來種作。男女衣著、悉如外人。黃髮垂髫、並怡然自樂。見漁人、乃大驚、問所從來。具答之、便要還家、設酒殺雞作食。村中聞有此人、咸來問訊。自云、先世避秦時亂、率妻子邑人來此絕境、不復出焉。遂與外人間隔。問今是何世。乃不知有漢、無論魏晉。此人一一爲具言所聞。皆歎惋。餘人各復延至其家、皆出酒食。停數日、辭去。此中人語云、不足爲外人道也。既出、得其船、便於向路、處處誌之。及郡下、詣太守、說如此。太守卽遣人隨其往、尋向所誌、遂迷不復得路。

南陽劉子驥、高尚士也。聞之欣然規往未果。尋病終。遂無問津者。

飲酒　陶潛

結廬在人境　而無車馬喧
問君何能爾　心遠地自偏
採菊東籬下　悠然見南山
山氣日夕佳　飛鳥相與還
此中有眞意　欲辯已忘言

山中問答　李白

問余何意栖碧山　笑而不答心自閑
桃花流水杳然去　別有天地非人間

竹里館　王維

獨坐幽篁裏　彈琴復長嘯
深林人不知　明月來相照

愛蓮說　周敦頤

水陸草木之花、可愛者甚蕃。晉陶淵明獨愛菊。自李唐來、世人甚愛牡丹。予獨愛蓮之出淤泥而不染、濯清漣

而不妖、中通外直、不蔓不枝、香遠益清、亭亭淨植、可遠觀而不可褻玩焉。予謂、菊花之隱逸者也。牡丹花之富貴者也。蓮花之君子者也。噫菊之愛、陶後鮮有聞。蓮之愛、同予者何人。牡丹之愛、宜乎衆矣。

李白傳

劉昫

李白字太白、山東人。少有逸才。志氣宏放、飄然有超世之心。父爲任城尉。因家焉。少與魯中諸生孔巢父・韓沔・裴政・張叔明・陶沔等、隱於徂來山、酣歌縱酒。時號竹溪六逸。天寶初、客遊會稽、與道士吳筠隱於剡中。既而玄

宗詔筠赴京師。筠薦之于朝。遣使召之、與筠俱待詔翰林。白既嗜酒、日與飲徒醉於酒肆。玄宗度曲、欲造樂府新詞、亟召白。白已臥於酒肆矣。召入以水灑面、卽令秉筆。頃之成十餘章。帝頗嘉之。嘗沈醉殿上、引足令高力士脫靴。由是斥去、乃浪迹江湖、終日沈飲。時侍御史崔宗之謫官金陵、與白詩酒唱和。嘗月夜乘舟、自採石達金陵。白衣宮錦袍、於舟中顧瞻笑傲、傍若無人。初賀知章見白、賞之曰、此天上謫仙人也。祿山之亂、玄宗幸蜀、在途以永王璘爲江淮兵馬都督・揚州節度大使。白在宣州謁見、遂辟爲從事。永王謀亂、兵敗。白坐長流夜郎。

後遇赦、得還、竟以飲酒過度、醉死於宣城。有文集二十卷、行於時。（舊唐書、文苑傳下）

望廬山瀑布　李白

日照香爐生紫煙、遙看瀑布挂前川。
飛流直下三千尺、疑是銀河落九天。

峨眉山月歌　李白

峨眉山月半輪秋、影入平羌江水流。
夜發清溪向三峽、思君不見下渝州。

遊洞庭　李白

洞庭西望楚江分、水盡南天不見雲。
日落長沙秋色遠、不知何處弔湘君。

記承天夜游　蘇軾

元豐六年十月十二日夜、解衣欲睡。月色入戶。欣然起行。念無與爲樂者、遂至承天寺、尋張懷民。懷民亦未寢。相與步于中庭。庭下如積水空明、水中藻・荇交横、蓋竹柏影也。何夜無月、何處無竹柏。但少閑人如吾兩人者。

耳。（東坡志林）

鴻門之會

司馬遷

楚軍夜擊、阬秦卒二十餘萬人、新安城南、行略定秦地。函谷關有兵守關、不得入。又聞沛公已破咸陽、項羽大怒、使當陽君等擊關。項羽遂入、至于戲西。沛公軍霸上、未得與項羽相見。沛公左司馬曹無傷、使人言於項羽曰、沛公欲王關中、使子嬰爲相、珍寶盡有之。項羽大怒曰、旦日饗士卒、爲擊破沛公軍。當是時、項羽兵四十萬、在新豐鴻門。沛公兵十萬、在霸上。范增說項羽曰、沛公

居山東時、貪於財貨、好美姬。今入關、財物無所取、婦女無所幸。此其志不在小。吾令人望其氣、皆爲龍虎、成五采。此天子氣也。急擊勿失。楚左尹項伯者、項羽季父也。素善留侯張良。張良是時從沛公。項伯乃夜馳之沛公軍、私見張良、具告以事、欲呼張良與俱去。曰、毋徒俱死也。張良曰、臣爲韓王送沛公。沛公今事有急、亡去不義不可不語。良乃入、具告沛公。沛公大驚曰、爲之奈何。張良曰、誰爲大王爲此計者。曰、鯫生說我曰、距關毋內諸侯、秦地可盡王也。故聽之。良曰、料大王士卒、足以當項王乎。沛公默然。曰、固不如也。且爲之奈何。張良曰、請往

謂項伯、言沛公不敢背項王也。沛公曰、君安與項伯有故。張良曰、秦時與臣游。項伯殺人、臣活之。今事有急。故幸來告良。沛公曰、孰與君少長。良曰、長於臣。沛公曰、君爲我呼入。吾得兄事之。張良出要項伯。項伯卽入見沛公。沛公奉巵酒爲壽、約爲婚姻、曰、吾入關秋毫不敢有所近。籍吏民、封府庫、而待將軍。所以遣將守關者、備他盜之出入與非常也。日夜望將軍至。豈敢反乎。願伯具言臣之不敢倍德也。項伯許諾。謂沛公曰、旦日不可不蚤自來謝項王。沛公曰、諾。於是項伯復夜去、至軍中、具以沛公言報項王。因言曰、沛公不先破關中、公豈敢入

乎。今人有大功。而擊之不義也。不如因善遇之。項王許諾。沛公旦日從百餘騎、來見項王、至鴻門、謝曰、臣與將軍戮力而攻秦。將軍戰河北、臣戰河南。然不自意、能先入關破秦、得復見將軍於此。今者有小人之言。令將軍與臣有郤。項王曰、此沛公左司馬曹無傷言之。不然籍何以至此。項王卽日因留沛公與飲。項王項伯東嚮坐、亞父南嚮坐。亞父者、范增也。沛公北嚮坐、張良西嚮侍。范增數目項王、舉所佩玉玦、以示之者三。項王默然不應。范增起、出召項莊、謂曰、君王爲人不忍。若入前爲壽、壽畢、請以劍舞、因擊沛公於座殺之。不者若屬、皆且爲

所虜。莊則入爲壽、壽畢曰、君王與沛公飲。軍中無以爲樂。請以劍舞。項王曰、諾。項莊拔劍起舞。項伯亦拔劍起舞。常以身翼蔽沛公。莊不得擊。於是張良至軍門見樊噲。樊噲曰、今日之事何如。良曰、甚急。今者項莊拔劍舞。其意常在沛公也。噲曰、此迫矣。臣請入與之同命。噲卽帶劍擁盾、入軍門。交戟之衞士、欲止不內。樊噲側其盾、以撞衞士仆地。噲遂入。披帷西嚮立、瞋目視項王。頭髮上指、目眦盡裂。項王按劍而跽曰、客何爲者。張良曰、沛公之參乘、樊噲者也。項王曰、壯士。賜之巵酒。則與斗巵酒。噲拜謝起、立而飲之。項王曰、賜之彘肩。則與一生彘

肩。樊噲覆其盾於地、加彘肩上、拔劍切而啗之。項王曰、壯士。能復飲乎。樊噲曰、臣死且不避。巵酒安足辭。夫秦王有虎狼之心。殺人如不能舉、刑人如恐不勝。天下皆叛之。懷王與諸將約曰、先破秦入咸陽者、王之。今沛公先破秦入咸陽、毫毛不敢有所近。封閉宮室、還軍霸上、以待大王來。故遣將守關者、備他盜出入與非常也。勞苦而功高如此。未有封侯之賞。而聽細說、欲誅有功之人。此亡秦之續耳。竊爲大王不取也。項王未有以應。曰、坐。樊噲從良坐。坐須臾、沛公起如廁。因招樊噲出。沛公已出。項王使都尉陳平召沛公。沛公曰、今者出未辭也。

爲之奈何。樊噲曰、大行不顧細謹。大禮不辭小讓。如今人方爲刀俎、我爲魚肉。何辭爲。於是遂去。乃令張良留謝。良問曰、大王來、何操。曰、我持白璧一雙、欲獻項王、玉斗一雙、欲與亞父、會其怒、不敢獻。公爲我獻之。張良曰、謹諾。當是時、項王軍在鴻門下。沛公軍在霸上。相去四十里。沛公則置車騎、脫身獨騎、與樊噲・夏侯嬰・靳彊・紀信等四人、持劍盾、步走、從酈山下、道芷陽間行。沛公謂張良曰、從此道至吾軍、不過二十里耳。度我至軍中、公乃入。沛公已去。間至軍中、張良入謝曰、沛公不勝杯杓、不能辭。謹使臣良奉白璧一雙、再拜獻大王、足下、玉斗

一雙、再拜奉大將軍、足下。項王曰、沛公安在。良曰、聞大王有意督過之、脫身獨去。已至軍矣。項王則受璧、置之坐上。亞父受玉斗、置之地、拔劍撞而破之曰、唉、豎子不足與謀。奪項王天下者、必沛公也。吾屬今爲之虜矣。沛公至軍、立誅殺曹無傷。居數日、項羽引兵西、屠咸陽、殺秦降王子嬰、燒秦宮室。火三月不滅。收其貨寶婦女而東。人或說項王曰、關中阻山河四塞。地肥饒可都以霸。項王見秦宮室皆以燒殘破、又心懷思欲東歸曰、富貴不歸故鄉、如衣繡夜行。誰知之者。說者曰、人言楚人沐猴而冠耳。果然。項王聞之、烹說者。項王使人致命懷王。

懷王曰如約。乃尊懷王爲義帝。（史記項羽本紀）

四面楚歌

司馬遷

項王軍壁垓下。兵少食盡。漢軍及諸侯兵、圍之數重。夜聞漢軍四面皆楚歌。項王乃大驚曰、漢皆已得楚乎。是何楚人之多也。項王則夜起飲帳中。有美人、名虞、常幸從。駿馬名騅、常騎之。於是項王乃悲歌慷慨、自爲詩曰、

力拔山兮氣蓋世。　時不利兮騅不逝。

騅不逝兮可奈何。　虞兮虞兮奈若何。

歌數闋。美人和之。項王泣數行下。左右皆泣、莫能仰視。

於是項王乃上馬騎。麾下、壯士騎從者八百餘人。直夜潰圍、南出馳走。平明、漢軍乃覺之、令騎將灌嬰以五千騎追之。項王渡淮。騎能屬者百餘人耳。項王至陰陵、迷失道。問一田父。田父紿曰、左。左。乃陷大澤中。以故漢追及之。項王乃復引兵而東、至東城。乃有二十八騎。漢騎追者數千人。項王自度不得脫、謂其騎曰、吾起兵至今八歲矣。身七十餘戰、所當者破、所擊者服、未嘗敗北。遂霸有天下。然今卒困於此。此天之亡我、非戰之罪也。今日固決死。願爲諸君決戰、必三勝之。爲諸君潰圍、斬將刈旗、令諸君知天亡我、非戰之罪也。乃分其騎以爲四

隊、四嚮。漢軍圍之數重。項王謂其騎曰、吾爲公取彼一將。令四面騎馳下、期山東爲三處。於是項王大呼馳下。漢軍皆披靡。遂斬漢一將。是時、赤泉侯爲騎將、追項王。項王瞋目而叱之。赤泉侯人馬俱驚、辟易數里。與其騎會爲三處。漢軍不知項王所在。乃分軍爲三、復圍之。項王乃馳、復斬漢一都尉、殺數十百人。復聚其騎、亡其兩騎耳。乃謂其騎曰、何如。騎皆服曰、如大王言。於是項王乃欲東渡烏江。烏江亭長艤船待。謂項王曰、江東雖小、地方千里、衆數十萬人、亦足王也。願大王急渡。今獨臣有船。漢軍至、無以渡。項王笑曰、天之亡我、我何渡爲。且

籍與江東子弟八千人、渡江而西。今無一人還。縱江東父兄憐而王我、我何面目見之。縱彼不言、籍獨不愧於心乎。乃謂亭長曰、吾知公長者。吾騎此馬五歲、所當無敵。嘗一日行千里。不忍殺之。以賜公。乃令騎皆下馬步行、持短兵接戰。獨項王所殺漢軍數百人。項王身亦被十餘創。顧見漢騎司馬呂馬童曰、若非吾故人乎。馬童面之。指王翳曰、此項王也。項王乃曰、吾聞、漢購我頭千金、邑萬戶。吾爲汝德。乃自刎而死。（史記、項羽本紀）

爭帝圖王勢已傾　八千兵散楚歌聲
烏江不是無船渡　恥向東吳再起兵

（詠史詩卷中）

韓信偽怯

司馬遷

淮陰侯韓信者淮陰人也。始爲布衣時、貧無行、不得推擇爲吏。又不能治生商賈。常從人寄食飲。人多厭之者。常數從其下鄉南昌亭長寄食數月、亭長妻患之。乃晨炊蓐食。食時信往、不爲具食。信亦知其意、怒竟絕去。信釣於城下。諸母漂。有一母見信飢、飯信竟漂數十日。信

喜謂漂母曰、吾必有以重報母。母怒曰、大丈夫不能自食。吾哀王孫而進食、豈望報乎。淮陰屠中少年有侮信者。曰、若雖長大好帶刀劍、中情怯耳。衆辱之曰、信能死刺我。不能死、出我胯下。於是信熟視之、俛出胯下蒲伏。一市人皆笑信以爲怯。漢五年正月、徙齊王信爲楚王、都下邳。信至國、召所從食漂母、賜千金、及下鄉南昌亭長賜百錢。曰、公小人也。爲德不卒。召辱己之少年、令出胯下者、以爲楚中尉、告諸將相曰、此壯士也。方辱我時、我寧不能殺之邪。殺之無名。故忍而就於此。（史記淮陰侯列傳）

張良、强忍

司馬遷

留侯張良者、其先韓人也。大父開地相韓昭侯・宣惠王・襄哀王。父平相釐王・悼惠王。悼惠王二十三年平卒。卒二十歲。秦滅韓、良年少、未宦事韓。韓破、良家僮三百人、弟死不葬。悉以家財、求客刺秦王、爲韓報仇。以大父・父五世相韓故。良嘗學禮淮陽。東見倉海君、得力士、爲鐵椎。重百二十斤。秦皇帝東游。良與客狙擊秦皇帝博浪沙中、誤中副車。秦皇帝大怒、大索天下、求賊甚急。爲張良故也。良乃更名姓、亡匿下邳。良嘗間從容步、游下邳

圯上。有一老父、衣褐至良所、直墮其履圯下、顧謂良曰、孺子、下取履。良愕然欲毆之。爲其老、彊忍下取履。父曰、履我。良業爲取履。因長跪履之。父以足受、笑而去。良殊大驚、隨目之。父去里所、復還曰、孺子可教矣。後五日平明、與我會此。良因怪之跪曰、諾。五日平明良往、父已先在。怒曰、與老人期後何也。去曰、後五日早會。五日雞鳴、良往。父又先在。復怒曰、後何也。去曰、後五日復早來。五日良夜未半往。有頃父亦來。喜曰、當如是。出一篇書曰、讀此則爲王者師矣。後十年興。十三年、孺子見我。濟北穀城山下黃石卽我矣。遂去無他言。不復見。旦日視其

書、乃太公兵法也。良因異之、常習誦讀之。後十三年、從高帝過濟北、果見穀城山下黃石。取而葆祠之。留侯死、并葬黃石冢。

太史公曰、學者多言無鬼神、然言有物。至如留侯所見老父予書亦可怪矣。高祖離困者數矣。而留侯常有功力焉。豈可謂非天乎。上曰、夫運籌策帷帳之中、決勝千里外、吾不如子房。余以爲其人計魁梧奇偉。至見其圖、狀貌如婦人好女。蓋孔子曰、以貌取人、失之子羽。留侯亦云。（史記、留侯世家）

留侯論

蘇軾

古之所謂豪傑之士、必有過人之節。人情有所不能忍者。匹夫見辱、拔劍而起、挺身而鬪。此不足爲勇也。天下有大勇者。卒然臨之而不驚。無故加之而不怒。此其所挾持者甚大、而其志甚遠也。夫子房受書於圯上之老人也、其事甚怪。然亦安知其非秦之世有隱君子者、出而試之。觀其所以微見其意者、皆聖賢相與警戒之義。而世不察、以爲鬼物。亦已過矣。且其意不在書。當韓之亡、秦之方盛也、以刀鋸鼎鑊、待天下之士。其平居無罪夷滅者、不可勝數。雖有賁育、無所復施。夫持法太急者、

其鋒不可犯。而其勢未可乘。子房不忍忿忿之心、以匹夫之力、而逞於一擊之間。當此之時、子房之不死者、其間不能容髮。蓋亦已危矣。千金之子、不死於盜賊。何者、其身之可愛、而盜賊之不足以死也。子房以蓋世之才、不爲伊尹・太公之謀、而特出於荊軻・聶政之計、以僥倖於不死。此圯上老人所爲深惜者也。是故倨傲鮮腆、而深折之。彼其能有所忍也、然後可以就大事。故曰、孺子可教也。楚莊王伐鄭。鄭伯肉袒、牽羊以逆。莊王曰、其君能下人。必能信用其民矣。遂舍之。句踐之困於會稽而歸、臣妾於吳者三年而不倦。且夫有報人之志、而不能

下人者、是匹夫之剛也。夫老人者以爲子房才有餘、而憂其度量之不足。故深折其少年剛銳之氣、使之忍小忿而就大謀。何則非有平生之素、卒然相遇於草野之間、而命以僕妾之役、油然而不怪者、此固秦皇之所不能驚、而項籍之所不能怒也。觀夫高祖之所以勝、項籍之所以敗者、在能忍與不能忍之間而已矣。項籍唯不能忍、是以百戰百勝、而輕用其鋒。高祖忍之、養其全鋒、而待其弊。此子房教之也。當淮陰破齊、而欲自王、高祖發怒、見於辭色。由此觀之、猶有剛强不忍之氣。非子房其誰全之。太史公疑子房以爲魁梧奇偉。而其狀貌、乃

如婦人女子、不稱其志氣。嗚呼、此其所以爲子房歟。

經下邳圯橋懷張子房

李白

子房未虎嘯　破產不爲家　滄海得壯士
椎秦博浪沙　報韓雖不成　天地皆振動
潛匿遊下邳　豈曰非智勇　我來圯橋上
懷古欽英風　唯見碧流水　曾無黃石公
歎息此人去　蕭條徐泗空。

蘇武

李瀚

前漢、蘇武、字子卿、杜陵、人。武帝、時、以中郎將、持節使匈奴。單于欲降之、迺幽武置大窖中、絕不飲食。天雨雪。武臥齧雪與旃毛、并咽之。數月不死。匈奴以爲神、乃徙武北海上、使牧羝。羝乳乃得歸。武杖漢節牧羊、臥起操持。節旄盡落。昭帝立、匈奴與漢和親、漢求武等。匈奴詭言武死。常惠教漢使者言、天子射上林中得雁。足有帛書言、在某澤中。由是得還。拜爲典屬國。武留匈奴十九歲。始以强壯出、及還鬚髮盡白。至宣帝時、以武著節老臣、令朝朔望、號稱祭酒。年八十餘卒。後圖畫於麒麟閣、法其形貌、署其官爵姓名。（蒙求卷中）

班超　　曾先之

初耿秉請伐匈奴、謂宜如武帝、通西域、斷匈奴右臂。上從之、以秉與竇固爲都尉、屯涼州。固使假司馬班超使西域。超至鄯善、其王禮之甚備。匈奴使來、頓疎懈。超會吏士三十六人曰、不入虎穴不得虎子。奔虜營、斬其使及從士三十餘級。鄯善一國震怖。超告以威德、使勿復與虜通。超復使于寘。其主亦斬虜使以降。於是諸國皆遣子入侍。西域復通。

[永元十四年]徵班超還京師。卒。超起自書生、投筆有封

侯萬里外之志。有相者、謂曰、生燕頷虎頸。飛而食肉。萬里侯相也。章帝時爲西域將兵長史。至上以超爲西域都護騎都尉、平定諸國、在西域三十年、以功封定遠侯。至是以年老乞歸、願生入玉門關。上許之。任尚代爲都護、請教。超曰、君性嚴急。水清無大魚。宜蕩佚簡易。尚私謂人曰、我以班君當有奇策、今所言平平耳。尚後果失邊和如超言。(十八史略卷三)

塞上行　　王昌齡

秦時明月漢時關　萬里長征人未還

但使龍城飛將在　不教胡馬渡陰山

出塞　王之渙

黃河遠上白雲間　一片孤城萬仞山
羌笛何須怨楊柳　春光不度玉門關

涼州詞　王翰

葡萄美酒夜光杯　欲飲琵琶馬上催
醉臥沙場君莫笑　古來征戰幾人回

逢入京使　岑參

故園東望路漫漫　雙袖龍鍾淚不乾
馬上相逢無紙筆　憑君傳語報平安

輕徭薄賦　唐太宗　司馬光

〔武德九年十一月丙午〕、上與群臣論止盜。或請重法以禁之。上哂之曰、民之所以爲盜者、由賦繁役重。官吏貪求、飢寒切身。故不暇顧廉恥耳。朕當去奢省費、輕徭薄賦、選用廉吏。使民衣食有餘、則自不爲盜。安用重法邪。

自是數年之後、海內升平、路不拾遺、外戶不閉、商旅野宿焉。上又嘗謂侍臣曰、君依於國、國依於民。刻民以奉君、猶割肉以充腹。腹飽而身斃、君富而國亡。故人君之患、不自外來、常由身出。夫欲盛則費廣。費廣則賦重。賦重則民愁。民愁則國危。國危則君喪矣。朕常以此思之。故不敢縱欲也。

剖身藏珠

[貞觀元年]上謂侍臣曰、吾聞、西域賈胡得美珠、剖身以藏之。有諸。侍臣曰、有之。上曰、人皆知笑彼之愛珠、而不愛其身也。吏受賕抵法、與帝王徇奢欲而亡國者、何以異於彼胡之可笑邪。魏徵曰、昔魯哀公謂孔子曰、人有好忘者、徙宅而忘其妻。孔子曰、又有甚者。桀紂乃忘其身。亦猶是也。上曰、然朕與公輩、宜戮力相輔。庶免爲人所笑也。(資治通鑑卷一百九十二)

縱囚論

歐陽脩

信義行於君子、而刑戮施於小人。刑入於死者、乃罪大惡極。此又小人之尤甚者也。寧以義死、不苟幸生。而視死如歸、此又君子之尤難者也。方唐太宗之六年、錄大辟囚三百餘人、縱使還家、約其自歸以就死。是以君子

之難能、期小人之尤者、以必能也。其因及期、而卒自歸無後者。是君子之所難、而小人之所易也。此豈近於人情。或曰、罪大惡極、誠小人矣。及施恩德以臨之、可使變而爲君子。蓋恩德入人之深、而移人之速、有如是者矣。曰、太宗之爲此、所以求此名也。然安知夫縱之去也、不意其必來以冀免、所以縱之乎。又安知夫被縱而去也、不意其自歸而必獲免、所以復來乎。夫意其必來而縱之、是上賊下之情也。意其必免而復來、是下賊上之心也。吾見上下交相賊、以成此名也。烏有所謂施恩德與夫知信義者哉。不然太宗施德於天下、於茲六年矣。不

能使小人不爲極惡大罪。而一日之恩、能使視死如歸、而存信義。此又不通之論也。然則何爲而可。曰、縱而來歸、殺之無赦、而又縱之而又來、則可知爲恩德之致爾。然此必無之事也。若夫縱而來歸而赦之、可偶一爲之爾。若屢爲之、則殺人者皆不死。是可爲天下之常法乎。不可爲常者、其聖人之法乎。是以堯舜三王之治、必本於人情、不立異以爲高、不逆情以干譽。

朗詠所收白詩

暮立　居易

黃昏獨立佛堂前　滿地槐花滿樹蟬
大抵四時心總苦　就中腸斷是秋天

八月十五日夜禁中獨直對月憶元九

銀臺金闕夕沈沈　獨宿相思在翰林
三五夜中新月色　二千里外故人心
渚宮東面煙波冷　浴殿西頭鐘漏深
猶恐清光不同見　江陵卑濕足秋陰

九月八日酬皇甫十見贈

君方對酒綴詩章　我正持齋坐道場
處處追遊雖不去　時時吟咏亦無妨

霜蓬舊鬢三分白　露菊新花一半黃
惆悵東籬不同醉　陶家明日是重陽

香爐峰下新卜山居草堂初成偶題東壁

日高睡足猶慵起　小閣重衾不怕寒
遺愛寺鐘欹枕聽　香爐峰雪撥簾看
匡廬便是逃名地　司馬仍爲送老官
心泰身寧是歸處　故鄉何獨在長安

小石城山記

柳宗元

自西山道口徑北踰黃茅嶺而下有二道其一西出尋

之無所得。其一少北而東。不過四十丈。土斷而川分。有積石、横當其垠。其上爲睥睨梁欐之形。其旁出堡塢。有若門焉。窺之正黑。投以小石、洞然有水聲。其響之激越、良久乃已。環之可上、望甚遠。無土壤而生嘉樹美竹。益奇而堅。其疏數偃仰、類智者所施設也。噫、吾疑造物者之有無久矣。及是愈以爲誠有。又怪其不爲之於中州、而列是夷狄、更千百年不得一售其伎。是固勞而無用。神者儻不宜如是、則其果無乎。或曰、以慰夫賢而辱於此者。或曰、其氣之靈不爲偉人、而獨爲是物。故楚之南、少人而多石。是二者、余未信之。

江雪　柳宗元

千山鳥飛絶　萬徑人蹤滅　孤舟蓑笠翁
獨釣寒江雪

遠山　歐陽脩

山色無遠近　看山終日行　峰巒隨處改
行客不知名

執牛耳

公會齊侯盟于蒙。孟武伯相。齊侯稽首。公拜。齊人怒。武侯曰、非天子寡君無所稽首。武伯問於高柴曰、諸侯盟、誰執牛耳。（哀十七年左傳）

矛盾

楚人有鬻楯與矛者。譽之曰、吾楯之堅、莫能陷也。又譽其矛曰、吾矛之利、於物無不陷也。或曰、以子之矛、陷子之楯、何如。其人弗能應也。（韓非子、難一）

蛇足

楚有祠者。賜其舍人巵酒。舍人相謂曰、數人飲之不足、

一人飲之有餘。請畫地爲蛇、先成者飲酒。一人蛇先成。引酒且飲之。乃左手持巵、右手畫蛇曰、吾能爲之足未成。一人之蛇成。奪其巵曰、蛇固無足。子安能爲之足。遂飲其酒。爲蛇足者、終亡其酒。（國策、齊策）

從隗始

郭隗先生曰、臣聞古之君人、有以千金求千里馬者。三年不能得。涓人言於君曰、請求之。君遣之。三月得千里馬、馬已死。買其首五百金、反以報君。君大怒曰、所求者生馬。安事死馬、而捐五百金。涓人對曰、死馬且買之五百金。況生馬乎。天下必以王爲能市馬、馬今至矣。於是

不能期年、千里之馬至者三。今王誠欲致士、先從隗始。隗且見事。況賢於隗者乎。豈遠千里哉。於是昭王爲隗築宮而師之。樂毅自魏往、鄒衍自齊往、劇辛自趙往、士爭湊燕。（國策、燕策）

破天荒

唐荆州衣冠藪澤。每歲解送舉人、多不成名。號曰天荒解。劉蛻舍人以荆解及第。號爲破天荒。（北夢瑣言卷四）

左袒

諸呂用事擅權、欲爲亂。……太尉將之入軍門、行令軍中曰、爲呂氏右袒。爲劉氏左袒。軍中皆左袒爲劉氏。（史

記、呂后本紀）

病入膏肓

公疾病。求醫于秦。秦伯使醫緩爲之。未至。公夢疾爲二豎子曰、彼良醫也。懼傷我。焉逃之。其一曰、居肓之上膏之下、若我何。醫至。曰、疾不可爲也。在肓之上膏之下、攻之不可、達之不及、藥不至焉。不可爲也。（成十年左傳）

塞翁馬

夫禍福之轉而相生、其變難見也。近塞上之人、有善術者。馬無故亡而入胡。人皆弔之。其父曰、此何遽不爲福乎。居數月、其馬將胡駿馬而歸。人皆賀之。其父曰、此何

遽不能爲禍乎。家富良馬。其子好騎、墮而折其髀。人皆弔之。其父曰、此何遽不爲福乎。居一年、胡人大入塞。丁壯者引弦而戰。近塞之人、死者十九。此獨以跛之故、父子相保。故福之爲禍、禍之爲福、化不可極、深不可測也。

（淮南子、人間訓）

五里霧中

張楷字公超。……隱居弘農山中。學者隨之、所居成市。……性好道術、能作五里霧。時關西人裴優亦能爲三里霧、自以不如楷。從學之、楷避不肯見。（後漢書張霸傳附傳）

洛陽紙價

左思字太冲、齊國臨淄人也。……貌寢口訥、而辭藻壯麗、不好交遊、惟以閑居爲事。造齊都賦、一年乃成。復欲賦三都。……構思十年、門庭藩溷、皆著筆紙、遇得一句、卽便疏之。自以所見不博、求爲祕書郎。及賦成、時人未之重。……安定皇甫謐有高譽。思造而示之。謐稱善、爲其賦序。張載爲注魏都、劉逵注吳・蜀而序之。……司空張華見而歎曰、班・張之流也。使讀之者盡而有餘、久而更新。於是豪貴之家競相傳寫、洛陽爲之紙貴。（晉書、文苑傳）

下篇

論語鈔

○子曰、學而時習之。不亦說乎。有朋自遠方來。不亦樂乎。人不知而不慍。不亦君子乎。

○子曰、巧言令色、鮮矣仁。

○曾子曰、吾日三省吾身。爲人謀而不忠乎。與朋友交、言而不信乎。傳不習乎。

○子曰、君子食無求飽、居無求安、敏於事、而愼於言、就

有道而正焉。可謂好學也已。

○子貢問曰、貧而無諂、富而無驕何如。子曰、可也。未若貧而樂道、富而好禮者也。子貢曰、詩云、如切如磋、如琢如磨。其斯之謂與。子曰、賜也、始可與言詩已矣。告諸往而知來者。(學而)

○子曰、吾十有五而志于學。三十而立。四十而不惑。五十而知天命。六十而耳順。七十而從心所欲、不踰矩。

○子曰、温故而知新、可以爲師矣。

○子曰、由、誨女知之乎。知之爲知之、不知爲不知。是知也。

○子張學干祿。子曰、多聞闕疑、愼言其餘、則寡尤。多見闕殆、愼行其餘、則寡悔。言寡尤、行寡悔、祿在其中矣。(爲政)

○子曰、富與貴、是人之所欲也。不以其道、得之不處也。貧與賤、是人之所惡也。不以其道、得之不去也。君子去仁、惡乎成名。君子無終食之間違仁、造次必於是、顚沛必於是。

○子曰、朝聞道、夕死可矣。

○子曰、見賢思齊焉、見不賢而內自省也。(里仁)

○哀公問曰、弟子孰爲好學。孔子對曰、有顏回者、好學、

不遷怒。不貳過。不幸短命死矣。今也則亡。未聞好學者也。

○子曰、賢哉回也。一簞食一瓢飲、在陋巷。人不堪其憂。回也不改其樂。賢哉回也。

○冉求曰、非不說子之道、力不足也。子曰、力不足者、中道而廢。今女畫。

○子游爲武城宰。子曰、女得人焉爾乎。曰、有澹臺滅明者。行不由徑。非公事、未嘗至於偃之室也。

○子曰、知之者不如好之者。好之者不如樂之者。(雍也)

○子曰、德之不脩、學之不講、聞義不能徙、不善不能改、

是吾憂也。(述而)

○曾子曰、士不可以不弘毅。任重而道遠。仁以爲己任。不亦重乎。死而後已。不亦遠乎。(泰伯)

○子在川上曰、逝者如斯夫。不舍晝夜。

○子曰、譬如爲山。未成一簣止吾止也。譬如平地。雖覆一簣、進吾往也。

○子曰、三軍可奪帥也。匹夫不可奪志也。

○子曰、歲寒然後、知松柏之後凋也。(子罕)

○顏淵死。子曰、噫、天喪予。天喪予。

○季路問事鬼神。子曰、未能事人。焉能事鬼。曰、敢問死。

曰、未知生。焉知死。

○子貢問、師與商也孰賢。子曰、師也過。商也不及。曰、然則師愈與。子曰、過猶不及。(先進)

○顏淵問仁。子曰、克己復禮爲仁。一日克己復禮、天下歸仁焉。爲仁由己。而由人乎哉。顏淵曰、請問其目。子曰、非禮勿視、非禮勿聽、非禮勿言、非禮勿動。顏淵曰、回雖不敏、請事斯語矣。

○司馬牛問君子。子曰、君子不憂不懼。曰、不憂不懼、斯謂之君子已乎。子曰、內省不疚、夫何憂何懼。

○司馬牛憂曰、人皆有兄弟。我獨亡。子夏曰、商聞之矣、

死生有命、富貴在天。君子敬而無失、與人恭而有禮、四海之內、皆兄弟也。君子何患乎無兄弟也。

○子曰、聽訟吾猶人也。必也使無訟乎。

○季康子問政於孔子。孔子對曰、政者正也。子帥以正、孰敢不正。

○季康子問政於孔子曰、如殺無道、以就有道、何如。孔子對曰、子爲政、焉用殺。子欲善、而民善矣。君子之德風也。小人之德草也。草尙之風、必偃。(顏淵)

○子貢問曰、鄉人皆好之何如。子曰、未可也。鄉人皆惡之何如。子曰、未可也。不如鄉人之善者好之、其不善者

惡之也。

○子曰、君子易事而難說也。說之不以道、不說也。及其使人也、器之。小人難事而易說也。說之雖不以道說也。及其使人也、求備焉。(子路)

○子曰、有德者、必有言。有言者、不必有德。仁者必有勇。勇者不必有仁。

○子曰、古之學者爲己、今之學者爲人。(憲問)

○子曰、可與言而不與言、失人。不可與言而與之言、失言。知者不失人、亦不失言。

○子曰、人無遠慮、必有近憂。

○子曰、躬自厚、而薄責於人、則遠怨矣。

○子曰、君子不以言舉人、不以人廢言。

○子貢問曰、有一言而可以終身行之者乎。子曰、其恕乎。己所不欲、勿施於人。

○子曰、過而不改、是謂過矣。（衛靈公）

○孔子曰、生而知之者上也。學而知之者次也。困而學之、又其次也。困而不學、民斯爲下矣。（季氏）

○子曰、道聽而塗說、德之棄也。

○子貢問曰、君子亦有惡乎。子曰、有惡。惡稱人之惡者。惡居下而訕上者。惡勇而無禮者。惡果敢而窒者。曰、賜

也亦有惡乎。惡徼以爲知者。惡不孫以爲勇者。惡訐以爲直者。（陽貨）

○子張曰、士見危致命、見得思義、祭思敬、喪思哀、其可已矣。

○子夏曰、博學而篤志、切問而近思。仁在其中矣。

○子夏曰、小人之過也必文。

○子貢曰、君子之過也、如日月之食焉。過也人皆見之。更也人皆仰之。（子張）

○大學之道、在明明德、在親民、在止於至善。知止而後有定。定而後能靜。靜而後能安。安而後能慮。慮而後能得。物有本末。事有終始。知所先後、則近道矣。古之欲明明德於天下者、先治其國。欲治其國者、先齊其家。欲齊其家者、先修其身。欲修其身者、先正其心。欲正其心者、先誠其意。欲誠其意者、先致其知。致知在格物。物格而后知至。知至而后意誠。意誠而后心正。心正而后身修。身修而后家齊。家齊而后國治。國治而后天下平。自天子以至庶人、壹是皆以修身爲本。其本亂而末治者否矣。其所厚者薄、而其所薄者厚、未之有也。

○小人閒居爲不善、無所不至。見君子而后厭然、揜其不善、而著其善。人之視己、如見其肺肝然。則何益矣。此謂誠於中、形於外。故君子必愼其獨也。

○所惡於上、毋以使下。所惡於下、毋以事上。所惡於前、毋以先後。所惡於後、毋以從前。所惡於右、毋以交於左。所惡於左、毋以交於右。此之謂絜矩之道。

附篇

○良藥苦於口　△說苑（ゼイエン）　書名。二十卷。前漢末年ニ、諸書中ノ教訓的又ハ隨筆的記事ヲ、劉向（キヤウ）ガ拔萃分類シテ編ミシ書。

○勿以善小而不爲　△劉備　字ハ玄德。後漢ノ靈帝ノ時、黃巾ノ賊ヲ伐チテ功アリ。後、蜀ニ入リテ帝位ニ卽ク。昭烈ト諡シ、先主トモヨバル。△之　「コレヲ」ト訓ムハ古來ノ習慣ナレド、實ハ無意味ノ助辭ニシテ、指スモノナシ。故ニ讀マザルモ可ナレド、舊ニ從フ。△三國志　書名。二十卷。晉ノ陳壽撰。ソノ注ハ宋ノ裴松（ハイ）之ノ作ニシテ、今日已ニ亡ビタル書ヲ引用シアルヲ以テ、學術上貴バル。

○功禍之所由　△蘇洵　北宋ノ文人。字ハ明允、號ハ老泉、老蘇トヨバル。官、祕書省校書郎ニ至ル。集ヲ嘉祐集トイフ。

○毋苟得　△禮記　書名。五經ノ一。漢代ノ編纂、禮ニ關スル諸書ノ記載ヲ編錄ス。漢ノ戴聖ノ傳ヘシモノトイフ。曲禮ハソノ卷首ノ篇名。

○愛親敬親　△孝經　書名。戰國時代ノ作カ。孔子ト曾子トノ問答ノ形式ヲカリテ、儒教ノ孝道ヲ說キタルモノ。ワガ國ニテモ、古來初學ノ必讀書タリ。

○讀未曾見之書　△謝肇淛（シヤヂウセイ）　明ノ萬曆頃ノ學者。字ハ在杭。官、工部郎中ニ至ル。著書多シ。△五雜組　書名。十六卷。謝ノ隨筆。俎ニ作ルハ非。

○喪與其易也寧戚　論語八佾篇中ノ語。△易　治ナリ。禮貌ヲ修治スルナリ。△檀弓（タングウ）　禮記中ノ篇名。

○苛政猛於虎　△泰山　山東省ノ名山。△夫子　モト、大夫ノ位ニアル者ノ敬稱。轉ジテ、師・長者ヲ指ス。孔門ニテ孔子ヲカクヨベリ。夫ハ大夫ノ夫ニシテ、子ハ男子ノ美稱。△式　車ノ前部ノ橫木ニ手ヲカケテ敬禮スルナリ。△子路　孔子ノ弟子、姓ハ仲、名ハ由、甚ダ積極的ノ性質ナリ。

△壹　語助ナリ。△而　乃ナリ。讀マザルモ可ナリ。△識　記憶セヨ。

○守株不得兎　△韓非子　書名。一名韓子。周末韓非ノ作トイフ。二十卷。法治主義者トシテノ彼ノ學說ヲ錄ス。

○以敬爲主　△程頤（イ）　宋ノ大儒。兄顥（カウ）（明道先生）トアハセテ二程子トイハル。字ハ正叔。河南ノ人。哲宗ノ時、西京國子監ノ管勾ニ終ル。△小學　書名。原名小學書。童蒙ノ教訓ノタメニ、朱子ノ門人劉子澄ガ、師ノ命ヲ奉ジテ、古書傳記中ヨリ編ム。內篇（立敎・明倫・敬身・稽古）・外篇（嘉言・善行）ヨリ成ル。△歡狎　ナレシタシミ、禮敬ノ念ナキコト。

○春夜宴桃李園序　△李白　唐ノ大詩人。字ハ太白。蜀ノ靑蓮鄉ニ生レシヲ以テ、靑蓮居士ト號ス。天才肌ノ詩人ニシテ、豪放、酒ヲ好ミ、謫仙ノ稱アリ。翰林院ニ供奉タリ。後、夜郎ニ流サレテ終ル。△風景　霞タナビク春景色。煙ハ霞、モヤ、水蒸氣ヲイフ。△大塊　大地ナリ。△天倫　父子兄弟ナド、天ヲ以テ合ヘル正シキ順序、——之樂事トハ、兄弟相會シテ酒宴ニ樂シムヲイフ。△惠連　南朝宋ノ詩人、姓ハ謝。△慨康樂　弟達ハ惠連ノ如キ文才アルニ、己ハ康樂公謝靈運ノ如キ文才ナク、弟ドモニ對シテハヅカシキナリ。靈運ハ宋代ノ詩人ニシテ、山水ヲ詠ズルニ巧ナリ。惠連ハソノ同族。△羽觴　雀ノ羽ノ形ヲツケタル杯、轉ジテ酒杯。△金谷　河南省洛陽縣ノ西北ニアリテ、谷中ニ金水トイフ川アリ。晉ノ荊州ノ刺史石崇、コヽニ別莊ヲ構ヘ、觀花ノ宴ヲ開イテ、詩ノ成ラザルモノニ罰酒ヲ飲マセタリトイフ。

○黃鶴樓送孟浩然之廣陵　△黃鶴樓　湖北省武昌ノ西ノ臺上ニアリシ樓ノ名。昔、一仙人（名一定セズ）黃鶴ニ乘ジテコヽヲ去リシ故ニ名ヅケラレタリト。コノ樓ニツイテ傳說多シ。△孟浩然　盛唐ノ詩人。襄陽ノ人ナレバ、孟襄陽トモヨバル。不遇、詩人張九齡ニ招カレテ、荊州ニ從事タリシ

コトアリ。山水自然ヲ詠ジタル詩多シ。△廣陵　郡名。今ノ江蘇省江都縣(揚州)。△故人　舊友。フルナジミ。漢文ニテハ、死亡ノ友人ノ意ニ非ズ。△煙花三月　春霞立ツ、ノドカナル三月ノ景色ヲイフ。コヽノ花ハ眞ノ花ニ非ズ、繁華ニ喩フルナリ。△揚州　州名。唐代ニ一時廣陵郡トヨベリ。明清ハ府名。今江都縣。△長江　揚子江ノ本名。青海省内ニ發シ、西康・雲南・四川ヲ經、宜賓縣ニ至ツテ岷江ヲ合シ、始メテ長江トヨブ。湖北・湖南ノ境ヨリ、江西・安徽省内ヲ流レ、江蘇ニ入ツテ、南京・揚州ヲ經、上海ニ出デ、吳淞江ニ出デテ、海ニ入ル。揚子江トハ下流ノ稱ナレド、我國ニテハ、揚子江ノ名ヲ以テ知ラル。

○望天門山　△天門山　安徽省ニアリ。東西ニ分レテ、長江ヲ挾ム、故ニ此名アリ、東ナルヲ博望山トイヒ、當塗縣ノ西南ニアリ、西ナルヲ梁山トイヒ、和縣ノ北ニアリ。△楚江　揚子江ノ一部ヲ指ス。△至此廻　通行本ハ此ヲ北ニ誤ル。

○早發白帝城　△白帝城　四川省奉節縣ノ東、白帝山上ノ城。蜀漢ノ吳ニ對スル防衛點、又四川ヨリ湖北ニ下ル門戸タリ。△江陵　湖北省ニ屬ス。唐宋ニ府ヲ置カレ、今縣名。△還　韻ヲフム爲ニ用ヒタル字、ヨリテ、到著ノ意ニ解シテ可ナリ。△啼不盡　ナキツクサズ、ナキヲハラズ。「盡」ハ「住」ニ作ルモノ多シ。住ハトヾムト訓ズ。

○送安井仲平東遊序　△安井仲平　名ハ衡、號ハ息軒、仲平ハ字。江戸末期ノ儒者、明治九年歿。享年七十八。漢民族ハ、名ノ外ニ、字・號ナドヲ有シ、對等以上ハ名ヲ以テ人ヲ呼バズ。名ト字トハ、關連アル字ヲ用フ。儒者之ニ倣フ、故ニ、名イハズ。衡ナル故ニ、平トヨビ、二男ナレバ仲トイフ。△鹽谷世弘　號ハ宕陰。幕府ノ儒官。慶應三年歿、年五十八。集ヲ宕陰存稿トイフ。△飫肥宮崎縣南那珂郡ニアリ。伊東氏ノ城下。△歲之甲申　文政七年。△昌平學　昌平坂學問所、江戸本郷湯島ニアリ、當時ノ大學トモイフベシ。△東

江戸ヲ指ス。△戊戌　天保九年。△今茲　天保十三年。△水府　水戸。△松洲　松島。

○桂林莊雜詠示諸生　△桂林莊　廣瀨淡窓ノ家塾、大分縣日田市豆田町ニアリ。△廣瀨建　字ハ子基、號ハ淡窓。豐後ノ儒者、弟謙(旭莊)ト共ニ知ラル。文久三年歿、年七十五。集ヲ遠思樓詩鈔トイフ。

○管仲傳　△管仲　春秋時代齊ノ政治家。名ハ夷吾、字ハ仲。桓公ヲ助ク。後世、法家トテ、法治主義者ノ祖トイハル。△司馬遷　前漢武帝ノ時ノ史學者。字ハ子長。史記ヲ著セリ。△潁上　潁水ハ河南省登封縣ノ西南ノ潁谷ニ出デ、安徽省ニ入リテ、淮河ニ入ル。上ハ河岸、ホトリ。今、安徽省ノ西部ニ潁上縣アリ。△鮑叔牙　齊ノ大夫。△史記　一百三十卷。正史ノ初。遷、父ノ談ノ志ヲツギ、黃帝ヨリ漢ノ武帝ニ至ルマデノ歷史ヲ記シシモノ。

○貧交行　△杜甫　唐ノ大詩人。李白トナラビ稱セラル。字ハ子美、杜陵ニヲリシヲ以テ、自ラ杜陵ノ布衣、又ハ少陵ノ野老トイフ。大杜トイフハ唐末ノ杜牧ヲ小杜トイフニ對セルナリ。官、工部員外郎ニ至リシヲ以テ杜工部トイヒ、集ヲ杜工部集トヨブ。社會ヲ歌ヒシ詩多シ。△翻手云々　掌ヲ上ニ向クレバ雲出デ、下ニ向クレバ雨降ル。天候定メガタキコトヲ、人情ノタヨリ難キコトニ喩フ。△君不見　諸君ハ知ラズヤ。君ハ世上ノ人ヲヨビカケテイフ。△此道　朋友ノ道。友情。

○孟嘗君好客一　△孟嘗君　姓ハ田、名ハ文。齊ノ相。△蘇代　合從家蘇秦ノ弟。時ニ燕ヨリ齊ニ遣ハサレタル人質ニツイテ齊ニアリ。後宋ニユキ、齊ノ宋ヲウチシトキ、燕ノ援軍ヲヨビテ齊ヲ破レリ。△今旦　今朝。△雨　名詞ヲ動詞ニヨム。雨フルト訓ジ、「フル」ト送假名スルハ常訓。△幸姬　寵愛ノ女。△封傳　パスポート。△函谷關　險ナルコト函ノ如シ。故ニ名ヅク。古來有名ナル要害。今、河南省靈寶縣ノ西南ニ位ス。

○讀孟嘗君傳　△王安石　宋ノ有名ナル政治家。又、學者トシテ、文人トシテ知ラル。スベテノ方面ニ新機軸ヲ出サンコトヲツトメタリ。字ハ介甫、號ハ半山。臨川ノ人ナルヲ以テ、集ヲ臨川集トイフ。唐宋古文八大家ノ一人。文公ト謚ス。

○孟嘗君好客ニ　△草具　粗末ナル食膳。草ハ粗ナルヲイフ。△魚客　膳ニ魚ノ料理ノツク身分ノ客。△不復歌　復歌ヲ打消スヲ以テ、二度ト歌ハヌナリ。不ノ上ニ復アルトキハ歌ハザルコトヲ再ビスルノ意トナリ、初ヨリ歌ハザルナリ。△記文書。△責　債ナリ。△薛　モト國名、齊之ヲ滅ス。孟嘗君ノ領地ナリ。今、山東滕縣ノ東南ニ當ル。△惇愚　惇ハ懦弱ナリ。△券契　ワリフ。二分シテ、各ヲ貸主・借主ニテ分チ持ツ。△下陳　陳ハ列ナリ。下手ニ婦人ノ居ル部屋ガナラベルナリ。△以義耳　一說ニ以ハ乃ノ誤ト。△先王之臣　先王ニ仕ヘタル重臣。表面ハ尙ビ、實ハ敬遠スルナリ。△三窟　義ヲカフト梁國ヨリノ招聘ト宗廟ノ建設ト。△國策　書名。一名戰國策。戰國時代ノ縱橫家ノ事蹟傳說ヲ國別ニ記シタル書。作者明ナラズ。秦代ノ作品カ。敍事ノ名文章ナリ。

○桃花源記　△桃花源　後人ハコノ仙境ヲ湖南省桃源縣ノ西南ニアル桃源山下ノ桃源洞ニアツ。今洞外ニ唐ノ詩人劉禹錫ノ題セシトコロノ桃源佳致碑ヲ建ツト。△陶潛　晉末宋初ノ詩人。字ハ淵明、或ハイフ、淵明ハ名ニシテ、字ハ元亮ナリト。名利ノ念少ク、嘗ツテ彭澤ノ令トナリシガ、官吏生活ハ己ノ性情ニ適セザルヲ感ジテ退官シ、悠々タル田園生活ヲ樂ミテ了レリ。故ニ自然ヲ詠ジタル詩多シ。靖節先生ト稱セラル。△太元　晉ノ孝武帝ノ年號(三七六—三九六)。△武陵　今湖南省常德縣ノ西。△太守　郡ノ長官。注ニ當時ノ太守ノ名ヲ劉歆ト記ス。△南陽　今河南省ノ西南部ヨリ湖北省ノ北部ニ及ブ地、郡治(郡ノ役所ノ所在地)ニ今同名ノ縣アリ。△劉子驥　名ハ麟之。

○飲酒　△南山　住宅ノ南方ノ山。

○山中問答　△人間　俗世界。

○竹里館　△竹里館　王維ノ輞川ノ別莊ノ中ニアリシモノ。△王維　盛唐ノ詩人。字ハ摩詰。開元ノ進士。官尙書右丞ニ至リシヲ以テ、王右丞トヨバル。集ヲ王右丞集又ハ輞川集トイフ。自然ヲ詠ズルニ長ズ。△深林　深キ竹林。

○愛蓮說　△周敦頤　北宋ノ學者。字ハ茂叔。濂溪(湖南)ニヲリシヲ以テ濂溪先生トヨバル。二程子ノ師ナレバ、宋學ノ開山トモイフベシ。△李唐　唐ノ天子ハ李氏ナレバイフ。

○李白傳　△劉昫　五代ノ晉ノ政治家兼文人。字ハ耀遠。舊唐書ヲ作ル。△任城　今ノ山東濟寧縣治。△尉　警察事務ヲトル官吏。△家　名詞ヲ動詞ニ使フ。家ヲ構フルコト。△魯　山東ノ別名。春秋時代ノ魯國ノ地ナレバナリ。△徂來山　來一ニ徠ニ作ル。山東省泰安縣ノ東南ニアリ。△竹溪徂來山下ニ在リ。△天寶　玄宗ノ年號(七四二—五五)△會稽　今浙江省紹興附近。△剡　嵊縣近傍ノ靈山。△翰林　翰林院ハ中央ノ官署。文人ナドコヽニ侍シテ、天子ノ命ヲ待チ、詔勅又ハ上奏文ノ回答ナドヲ草ス。待詔ハ官名。△樂府新詞　新作ノ樂歌。樂府ハ漢代ノ役所ノ名、音樂ヲ掌ル。又、樂府ニテ採用ノ樂曲ヲイフ。△高力士　玄宗ノ信用厚カリシ宦官ノ名。△侍御史　官名。中央ニアリテ官吏ノ檢察ヲ掌ル。△金陵　今ノ南京。唐時今ノ鎭江ノアタリモイヘド、此ハ然ラザルベシ。△採石　采石山、又牛渚山。長江ニ突出スレバ、采石磯・牛渚山トモイフ。安徽省當塗縣ノ西北ニアリ。△賀知章　詩人。又書ニ巧ナリ。△祿山。安祿山。天寶十四年叛ス。△揚州　今江蘇省江都縣。△宣州　今安徽省宣城縣。△夜郎　今ノ貴州省桐梓縣ノ東。湖南省西部ノ夜郎ニ非ズ。△舊唐書　二百卷。唐代ノ正史。歐陽脩改編ノ新唐書ニ對シテ舊唐書トイフ。

○望廬山瀑布　△廬山　江西省九江縣南ニアル名山。名勝地トシテ、避暑地トシテ今尙有名。△香

盧　廬山ノ北峰ノ名。

○峨眉山月歌　△峨眉山　四川省峨眉縣ノ西南ニアリ。兩山相對スルヲ以テ名ヅク。△半輪　陰曆七八日頃ノ月。△平羌　一名青衣水。四川省廬山縣ノ西北ニ發シ、東南流シ、樂山縣（嘉定）ニ至リテ岷江ニ入ル。△清溪　四川省雅安縣ノ南ニアリ。一說ニ內江縣ノ東北トイヘド、平羌江トアマリニカケ離レタリ。但シ、詩句必ズシモ地理トアハザルハ常例ナリ。△三峽　四川・湖北間ノ長江ノ三ツノ峽、說一ナラズ。巴峽・明月峽・巫峽トイヒ、巫峽・西陵峽・歸峽トイヒ、廣溪峽・巫峽・西陵峽トイヒ、西陵峽・明月峽・黃牛峽トイヒ、西陵峽・巫峽・瞿唐峽トイフ。四川省內長江ノ險少カラズ。說從ツテ多シ。△思君　君ハ月ヲ指ス。兩岸高ケレバ月見エザルナリ。△渝州　今ノ重慶ナリ。

○遊洞庭　△洞庭　湖南省北部ニアル湖名。△楚江分。長江流域ノ支流多キ形容。△長沙　洞庭湖ノ東南ニアリ。漢代賈誼（カギ）ノ流サレシ所。作者ガ流謫ノ同境遇ニ感ジタイフ。△湘君　湘江ノ水神。一說ニ、堯ノ二女舜ニ嫁シ、夫ヲ逐ウテ來リ、コヽニ溺死シテ水神トナルト。

○記承天夜游　△蘇軾　北宋ノ文人。字ハ子瞻、號ハ東坡、蜀ノ眉山ノ人。王安石ニ反對セリ。唐宋古文八大家中ノ一人ニシテ、詩文ニ巧、書畫ヲモヨクセリ。△元豐　神宗ノ年號（一〇七八—八五）。△承天寺　湖北省黃岡縣ノ南ニアリ。△竹柏　和名「ナギ」。

○鴻門之會　△鴻門　今陝西省臨潼縣ノ東。△阬生キ埋メニスルナリ。△新安　今河南省鐵門縣ノ塔泥鎭。△沛公　後ノ漢ノ高祖。兵ヲ沛（今ノ江蘇者沛縣ノ東）ニアゲ、沛公ト稱ス。△咸陽　陝西省長安縣ノ西北ニアル縣名。△項羽　名ハ籍、字ハ羽。△當陽君　英布（黥布）。△戲水（渭水ノ支流）ノ西。△霸上　霸（渭水ノ支流）水ノホトリ。△左司馬　官名、軍事ヲ掌ル。△關中　今ノ

陝西省ノ地、東ニ函谷關、西ニ隴（散）關、南ニ武關、北ニ蕭關アリ。△子嬰　秦王ナリ。已ニ沛公ニ下ル。△旦日　明日。△新豐　今ノ臨潼縣ノ東。△范增　時ニ年七十、項羽ヲ佐ク。羽尊ンデ亞父ト呼ベリ。△志不在小　天子タラント欲スルヲ指ス。△爲龍虎成五采　立上ル氣ハ龍虎ノ形ヲ成シ、五色ナリ。△左尹　官名。△項伯　名ハ纏、字ハ伯。後、射陽侯ニ封ゼラル。△季父　父ノ末弟。△留　今ノ江蘇省沛縣ノ東南。△張良　字ハ子房。韓ノ大臣ノ家ニ生レ、嘗ツテ、韓ノ仇ヲ復サント、始皇ヲ博浪沙ニ襲擊シ、失敗シテ下邳ニ隱レ、後沛公ニ仕フ。漢ノ功臣ノ一人。△送沛公　沛公ノ西征ヲ送リ來レルヲイフ。△黥生　名不明。△安與項伯有故　何故ニ項白ト親シキカトノ意。△執與君少長　君トイヅレガ年長ナルカ。△吾得　ワレ願ハン。△要　要求ス。シヒ求ムルナリ。△奉巵酒爲壽　尊者ニ酒杯ヲ進メテソノ健康ヲ祝スルナリ。巵ハサカヅキ。△秋毫不敢有所近自己ノ所有物トナスモノ少シモナシ。△籍　戶口調査ヲナスナリ。△謝　アヤマル。△東嚮　東ニ向クナリ。△目　メクバセスルナリ。△示之者三　者ハ助辭、……スルコト。△項莊　羽ノ從弟。△樊噲　沛ノ人。モト犬殺ヲ業トセリト傳フ。後、舞陽侯ニ封ゼラレ、武ノ諡アリ。△同命　生死ヲ與ニス。△披帷　カーテンヲマキ上グルナリ。△頭髮上指目眦盡裂　大イニ怒レル形容。頭髮立チ、マナジリ裂ク、事實ヲ誇張シタル形容ナリ。△何爲者　「ナンスルモノゾ」ト訓ミナラヘリ。何者ゾト詰問スル意。△參乘　陪乘者。古制、御者中央ニ乘リ、尊者ハ左、陪乘者ハ右ニ乘ル。△斗巵酒　一斗入リノ大盃。△如恐不勝　キハメテ多キナリ。△細說　小人ノ讒言。△都尉　軍事ヲ掌ル地方官。實ハ平未ダ都尉タラズ。或ハイフ誤ト。△陳平　漢初ノ功臣。後、呂氏ヲ平ゲテ功アリ。△何操　何ヲミヤゲ物トシテ持參セルカ。△酈山　驪山。陝西省臨潼縣ノ東南ニアリ、藍田山ニ連ル。

△芷陽　長安ノ東ニアリ。△間行　間道ヨリ行ク。△栝杓　栝ハ盃。△大將軍　范增ヲ指ス。△以已ニ通ズ。△本紀　紀傳體ノ歴史ニ於テ、天子ヲ中心ニ大事件ヲ年代順ニ記セル部分ヲイフ。

○四面楚歌　△垓下　今ノ安徽省靈壁縣ノ東南。△陰陵　安徽省定遠縣ノ西北。△東城　定遠縣ノ東南。△披靡　風ニ吹倒サレテナビキ伏シタル草ノ如ク、軍ガツブルヽコト。△赤泉侯　楊喜。△烏江　安徽省和縣ノ東北ニ位ス。△騎司馬　官名。

○烏江　△胡曾　唐ノ末ノ詩人。詠史詩ヲ以テ知ラル。

○韓信僞怯　△淮陰　今江蘇省ニ同名ノ縣アリ。△南昌　淮陰縣ノ東南。△蓐食　床ノ中ニテ食事スルナリ。△諸母　數人ノ老婆。△王孫　ナホ公子トイフガ如シ。△屠中　屠殺業者ノ仲間。△衆辱　衆人ノ前ニテ辱カシムルナリ。△下邳（カヒ）　今ノ江蘇省邳縣ノ東。

○張良强忍　△大父　祖父。△淮陽　今、河南省ニ同名ノ縣アリ。△倉海君　未詳。△博良沙　今ノ河南省陽武縣ノ東南。△圯　川ノ上ノ土橋ノコトヲソノ地方ニテハ圯トイフ。圯橋ハ今ノ江蘇省邳縣ノ南ニアリ。沂水ニカヽル。△目　目送スルナリ。△濟北　今山東省長清縣ノ南方。△穀城山　山東省東阿縣ノ東北ニアリ。一名黄山。△太公　周ノ太公望呂尙。△葆祠　葆ハ寶ナリ。寶トシテ祀ルナリ。△物　怪物。△子羽　濟臺滅明、字ハ子羽。狀貌見ニクシ。初、孔子思フ、材取ルニ足ラズト。故ニ此言アリ。仲尼弟子列傳ニ見ユ。△世家　史記ハ、本紀・列傳ノ外ニ、諸侯・諸王等ノタメニ世家ヲ立テタリ。

○留侯論　△賁育　孟賁・夏育、共ニ古ノ勇者。△一擊之間　博浪沙ノ故事ヲ指ス。△千金之子云云、金持ノ子ハツマラヌコトニ命ヲ捨テズ。史記貨殖傳ノ語ニ基ヅクトイハル。△伊尹　殷ノ湯王ヲ輔ク。△太公　呂尙ハ周ノ武王ヲ輔ク。△荆軻　燕ノ太子丹ニ依賴セラレテ、秦ノ始皇ヲ暗殺セ

ントシテ失敗セシ人。△聶政　嚴仲子ニ賴マレテ韓相俠累ヲ刺殺シテ自殺セシ人。△鮮腆　自ラ尊大ニ構フルナリ。△鄭伯　鄭ノ襄公。△會稽　山名、浙江省紹興縣東南ニアリ。△臣妾　ナホ奴婢トイフガ如シ。男ノ奴ニ對シ、婢ヲ妾トイフ。ココハ妻妾ノ妾ニ非ザルナリ。△高祖　漢ノ高祖劉邦。△油然　平氣ナルサマ。△淮陰破齊　淮陰侯韓信齊ヲ平グシコト。△太史公　司馬遷太史ノ官ニアリ。故ニ自ラカクイフ。

○經下邳圯橋懷張子房　△虎嘯　君臣相アフコトヲイフ。ココハ張良ガ高祖ニ重用セラレシコト。△徐泗　徐河・泗水。

○蘇武　△李瀚（カン）　五代ノ人。翰林學士。蒙求ノ注ヲ書ク。△杜陵　今陝西省長安縣ノ東南。△中郎將　官名、將軍ニ次グ。△單于　匈奴ノ君長ノ稱。△北海　今ノバイカル湖トイフ。△常惠　武ニ從ヒテ匈奴ニ使シテ抑留セラレ、蘇武ノ後ニ典屬國トナリテ功アリ。△上林　今ノ長安ノ西方ニ在リシ天子ノ園。△典屬國　官名。外國ヨリ降參シ來レル者ヲ掌ル。△祭酒　官名。功高キ者ヲ任ズ。△麒麟閣　閣名。宣帝霍光等十一人ノ功臣ノ像ヲ閣上ニ描カシム、武其中ニアリ。△蒙求　童幼ノタメニ、四字ノ韻語ヲ重ネテ、古人ノ事蹟ヲ記シタル書。宋元及ビワガ室町・江戸ニ流布セリ。

○班超　△班超　字ハ仲升。扶風平陵ノ人。彪ノ子。永平十六年假司馬トナル。永元十四年九月ニ歿ス。△曾先之　元人。字ハ從野、廬陵ノ人。詳傳ヲ傳ヘズ。十八史略ヲ著ス。△耿秉　字ハ伯初。兵法ニ明ルク、漢ノ外憂ハ匈奴ニアリト信ジ、之ヲハカル。永平十五年駙馬都尉トナリ、匈奴ヲ討チテ功アリ。征西將軍・光祿勳ニ至ル。△竇固　字ハ孟孫。西域ニ功ヲ立ツ。光祿勳・衛尉トナル。△涼州　今ノ甘肅省ノ地。△鄯善　樓蘭ノ後。今ノ新疆省ロブノール湖ノ南ニ位ス。△于闐　又于闐。今ノ新疆省和闐地方ニアリ。△永元　和帝ノ年號（八九—一〇三）。△定遠　今ノ陝西省南部ノ

鎮巴縣ノ地。△玉門關　甘肅省敦煌縣ノ西北、西域トノ界ニアル關名。
○塞上行　△王昌齡　盛唐ノ詩人。字ハ少伯。△龍城　漢北塔米爾河岸、匈奴ノ天ヲ祭リシ所。△龍城飛將　漢ノ武帝ノ時ノ飛將軍李廣ノ如キヲ指ス。△陰山　綏遠省ノ中央ヲホボ東西ニ走ル山脈ニシテ、東興安嶺ニ接ス。匈奴ハ常ニ此險ヲカリテ漢ヲ侵セリ。
○出塞　△王之渙　盛唐ノ詩人。△孤城　涼州城ヲ指ス。△何須怨楊柳　折楊柳トイフ送別ノ曲ヲ歌フ要ナシ。
○涼州詞　△王翰　盛唐ノ詩人。字ハ子羽。
○逢入京使　△岑參　盛唐ノ詩人。嘉州刺史タリシコトアリ、ヨツテ岑嘉州トヨバル。△漫漫　遠キサマ。△龍鍾　淚流レテウルホフサマ。
○輕徭薄賦　△司馬光　北宋ノ大政治家。陝州夏縣涑水ノ人。字ハ君實。神宗ノ時ニ王安石ノ政策ニ反對シテ一タビ逐ハレ、哲宗ノ時ニ中央ニ戻リテ新法ヲ改ム。溫國公ヲ贈ラレタレバ溫公トヨバル。資治通鑑ノ撰者。△武德　唐ノ高祖ノ年號(六一八—二六)。
○剖身藏珠　△貞觀　唐ノ太宗ノ年號(六二七—四九)。△魏徵　字ハ玄成。太宗ノ功臣。△資治通鑑　二百九十四卷。周末ヨリ五代ニ至ル編年史。人主ノ政治ノ鑑卽チ參考書ノ意。
○縱囚論　△歐陽脩　北宋ノ文人。宋代古文復興ノ功勞者。廬陵ノ人、字ハ永叔、號ハ醉翁、晚年六一居士ト稱セリ。官、翰林院侍讀學士・樞密副使・參知政事トナリ、出デテ青州ニ知タリ。謚ヲ文忠公トイフ。故ニ集ヲ歐陽文忠公集ト總稱ス。△三王　夏・殷・周三代ノ各初代ノ天子、卽チ、夏禹・殷湯・周文王(又ハ文王・武王)。
○暮立　△白居易　中唐ノ詩人。字ハ樂天、晚ニ香山居士ト稱ス。江州司馬・杭州刺史・蘇州刺史ヲ經、後、刑部尙書ヲ以テ致仕ス。ソノ詩ハ頗ル平易ニシテ、ヨク社會ヲ詠ゼリ。元稹ト友トシ善

ク、元白ト稱セラル。集ヲ白氏文集トイヒ、又、年號ニトリテ白氏長慶集トイフ。白香山詩集ハ清ノ汪立名ガ詩ノミヲ編校セシモノナリ。
○憶元九　△元九　元稹。△三五夜中　十五夜。
△渚宮　春秋楚宮ノアリシ地。今、湖北省江陵縣城內。當時元稹ハ江陵ニアリ。
○酬皇甫十見贈　△一半黃　半バ開ク。九月九日ニ先立ツ一日ナレバイフ。△東籬云々　陶淵明ノ故事。
○題東壁　△遺愛寺・香爐峰　峰ハ廬山ノ北峰、遺愛寺ハ北ニアリ。△匡廬　廬山ノ總稱。△司馬　樂天時ニ江州ノ司馬タリ。
○小石城山記　△柳宗元　中唐ノ文人。字ハ子厚。河東ノ人ナレバ柳河東トモイヒ、柳州ノ刺史ニ終ルヲ以テ柳柳州トイフ。山水ノ遊記ニ巧ナリ。△土斷　川ノ流ヲタツナリ。△堠　限界ナリ。△梁欄　欄モ梁、ハリ。△堡塢　小城。△美箭　箭ハ篠竹、ヤダケ。△疏數　配置ノ疎密一樣ナラザルコト。
○江雪　△蓑笠翁　漁翁。
○執牛耳　△公　魯ノ哀公。△齊侯　當時ハ平公。
△蒙　春秋時代魯ノ邑。今ノ山東蒙陰縣ノ西南。
△盟　古、戰爭ヲ避ケンガタメニ、諸侯相會シテ神ニ盟ヒテ約束スルコト。犧牲ヲ殺シテ、ソノ左耳ヲ傷ケテ血ヲトリ、ソレヲ以テ血書シ、了リテソノ血ヲヌルナリ。△孟武伯　名ハ彘、孟懿子ノ子。△稽首　首ヲ地ニツクルマデ下グルナリ。△拜　手ヲコマネク所マデ首ヲ下グ。稽首ニ比スレバ輕キ禮。△高柴　孔子ノ弟子子羔。△執牛耳　犧牲ノ牛ノ耳ヲトリ、世話役ヲスルナリ。△左傳　魯ヲ中心ニ年代順ニ大事件ヲ記シタル春秋トイフ書ノ史實ヲ、左丘明トヨブ人ガ敷衍シタル書トイハル。古文ノ代表作トシテ尊重セラル。本名ハ左氏傳。
○蛇足　△祠者　神官ノ如キモノ。
○從隗始　△不能期年　一年未滿。△宮　古ハ天

子ニ限ラズ。△樂毅　燕ノ兵法家。昭王ニ仕ヘテヨリ、齊ヲ破ル。惠王ノ世ニ讒セラレテ趙ニ奔リ、ヤガテ燕・齊ニ破ラル。惠王之ヲ悔イ、遂ニ燕・趙兩國ノ客卿タリ。△鄒衍　齊ノ人。稷下ニヲリテ陰陽五行ノ說ヲ立テタリ。△劇辛　趙ノ人。後、燕ノタメニ齊ヲ破リテ功アリ。

○破天荒　△荊州　今ノ湖南省江陵縣。△劉蛻　字ハ復愚。官左拾遺ニ至リ、後華陰令ニ左遷セラル。文ニ巧ナリ。△北夢瑣言　宋ノ孫光憲著。唐・五代ノ逸事ヲ錄ス。孫、荊州夢澤ノ北ニ居リシヲ以テ書ニ名ヅク。

○左袒　△諸呂　漢ノ高祖ノ后呂氏ノ一族。△太尉　官名。丞相同等ノ武官、コヽハソノ官ニアリシ周勃ヲ指ス。△劉氏　漢室ノ姓ハ劉。

○病入膏肓　△公　魯ノ成公。△秦伯　當時ハ桓公。△醫緩　緩ハ醫師ノ名。△達　針ヲ達セシムルナリ。

○塞翁馬　△胡　北方ノ蠻族ノ名。後ノ匈奴。△淮南子　漢ノ淮南王劉安ノ幕下ニ命ジテ作ラシメシ書。各方面ニ涉リテ記セリ。

○五里霧中　△弘農　今ノ河南省內。△關西　函谷關以西ノ地ヲイフ。△後漢書　後漢ノ正史。南朝宋ノ范曄撰。九十卷。

○洛陽紙價　△洛陽　今河南省ニ屬ス。晉モコヽニ都セリ。△三都　魏・吳・蜀ノ都。△安定　今ノ甘肅省固原縣ノ一帶。△皇甫謐　晉初ノ學者。字ハ士安。△張載　字ハ孟陽。官中書侍郎ニ至ル。文ニ巧ナリ。△司空　土木事業ヲ掌ル官。△張華　字ハ茂先。學問文章ニ秀ヅ。廣武縣侯トナル。△班張　後漢ノ班固（兩都賦ヲ作ル）ト張衡（二京賦ヲ作ル）ト。△晉書　晉代ノ正史。一百三十卷。唐ノ房喬等勅ヲ奉ジテ作ル。

23—1

漢文　一

昭和二十二年十二月十一日　印刷
昭和二十二年十二月十五日　発行
昭和二十三年度第一次発行
定價九円四十錢

APPROVED BY MINISTRY OF EDUCATION
(DATE Dec. 11, 1947)

著作權所有
著作兼発行者　東京都千代田区神田岩本町三番地　中等學校教科書株式會社　代表者　阿部眞之助

印刷者　東京都北区稻付町一丁目二〇八番地　二葉印刷株式會社　代表者　大野治輔

発行所　東京都千代田区神田岩本町三番地　中等學校教科書株式會社

広島大学図書
0130449563